開催報告書

○開催日　令和５年 10 月 25 日（水）
○会　場　あきた芸術劇場ミルハス 中ホール

令和６年２月

第 17 回３Ｒ推進全国大会実行委員会

環境省、環境省東北地方環境事務所、秋田県、３Ｒ活動推進フォーラム

目　　次

１．大会概要 1

２．式典

（１）主催者挨拶　角倉一郎環境省環境再生・資源循環局次長、神部秀行秋田県副知事、
細田衛士３Ｒ活動推進フォーラム会長 3

（２）来賓挨拶　北林丈正秋田県議会議長 5

（３）表彰式　令和５年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰 6

令和５年度３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞表彰 8

３．記念シンポジウム

循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション

～2050 年カーボンニュートラルの実現に向けて～

（１）基調講演「３Ｒ・循環経済の加速化に向けて」 9

３Ｒ活動推進フォーラム会長、東海大学副学長・政治経済学部経済学科教授、
慶應義塾大学名誉教授、中部大学名誉教授　細田衛士氏

（２）パネルディスカッション「循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション」 17

＜コーディネーター＞

３R活動推進フォーラム副会長、特定非営利活動法人持続可能な社会をつくる元気ネット顧問
崎田裕子氏

＜パネリスト＞

秋田エコプラッシュ株式会社専務取締役　小泉 剛氏
認定特定非営利活動法人環境あきた県民フォーラム理事長　佐藤 充氏
総合地球環境学研究所教授　浅利 美鈴氏
秋田県生活環境部環境整備課長　大門 洋氏
環境省環境再生・資源循環局循環型社会推進室長　近藤 亮太氏

（３）閉会挨拶　梶原成元３Ｒ活動推進フォーラム副会長 37

４．関連イベント

（１）３Ｒ推進展示コーナー 38

（２）施設見学会 39

５．資料

（１）第 17 回３Ｒ推進全国大会開催案内（参加申込書） 40

（２）第 17 回３Ｒ推進全国大会ポスター 41

（３）参加者用パンフレット 42

（４）参加者アンケート 43

（５）報道掲載記事 56

１．大会概要

●開催日時　　令和５年10月25日（水）　13：00～16：30

●会　　場　　あきた芸術劇場ミルハス 中ホール（秋田県秋田市千秋明徳町2-52）

●主　　催　　環境省、環境省東北地方環境事務所、秋田県、３Ｒ活動推進フォーラム

●開催内容

（１）大会式典（13：00～14:20）

・主催者挨拶　　角倉一郎環境省環境再生・資源循環局次長
※ 滝沢求副大臣が公用のため角倉一郎次長が代理出席
神部秀行秋田県副知事
細田衛士３Ｒ活動推進フォーラム会長

・来賓挨拶　　北林丈正秋田県議会議長

・表彰式　　循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰
３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

（２）記念シンポジウム（14：20～16：30）

循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション～2050年カーボンニュートラルの実現に向けて～

・基調講演「３Ｒ・循環経済の加速化に向けて」
３Ｒ活動推進フォーラム会長、東海大学副学長・政治経済学部経済学科教授、
慶應義塾大学名誉教授、中部大学名誉教授　　細田衛士氏

・パネルディスカッション「循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション」
＜コーディネーター＞
３Ｒ活動推進フォーラム副会長、特定非営利活動法人持続可能な社会をつくる元気ネット顧問
崎田裕子氏

＜パネリスト＞

秋田エコプラッシュ株式会社専務取締役	小泉 剛氏
認定特定非営利活動法人環境あきた県民フォーラム理事長	佐藤 充氏
総合地球環境学研究所教授	浅利 美鈴氏
秋田県生活環境部環境整備課長	大門 洋氏
環境省環境再生・資源循環局循環型社会推進室長	近藤 亮太氏

・閉会挨拶　　梶原成元３Ｒ活動推進フォーラム副会長

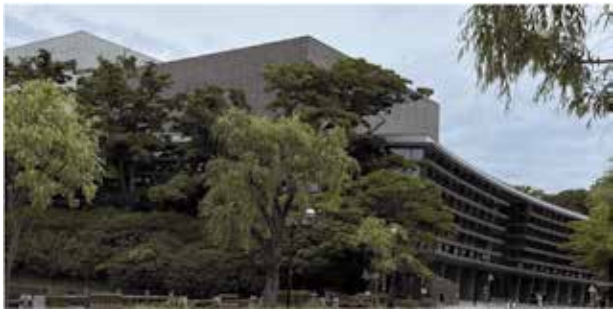
（３）関連イベント

・３Ｒ推進展示コーナー
10月25日（水）12:00～16:45　　あきた芸術劇場ミルハス　中ホール　メインホワイエ

・施設見学会
10月26日（木）　9:15～12:00　　秋田洋上風力発電、秋田バイオガス発電所

●参加者数　　計236名

●会場風景

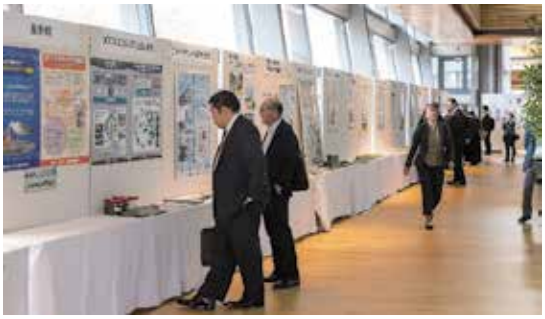


会場となった　あきた芸術劇場ミルハス

大会の受付

大会式典の様子

記念シンポジウムの様子



3R推進展示コーナーの様子

２．式典

（１）主催者挨拶

●角倉一郎氏（環境省環境再生・資源循環局次長）

皆様こんにちは。只今ご紹介にあずかりました、環境省の角倉と申します。本日は第17回３Ｒ推進全国大会に全国から大勢の皆様にご参加いただき誠にありがとうございます。また、本大会開催にご尽力いただきました秋田県の神部副知事をはじめとする秋田県の皆様と関係団体の皆様に心から感謝を申し上げます。大会の開催にあたり環境省を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

これまでの経済社会システムにおいては、資源の消費と経済成長とが密接にリンクしておりましたが、安くて大量の資源を入手できる時代はすでに終わりを迎えつつあります。大量生産・大量消費・大量廃棄の一方通行の経済社会システムはすでに行き詰まりを迎えつつあります。地球温暖化への対応や生物多様性保全の観点からも、持続可能な形で資源を利用する循環型社会へ、いちはやく移行していくことが必要不可欠です。循環型社会への移行は地域の活性化と新しい成長の扉を開く鍵でもあります。こうした中、今回で第17回目を迎える本大会は、国民の皆様、事業者の皆様、そして地方自治体といった、あらゆる関係者の皆様が一同に会し、３Ｒ・資源循環の先進的な取組について理解を深めていただくとともに、全国に発信していく場でもあります。

本大会は２つの部で構成され、第１部の大会式典では、循環型社会の形成に先駆者として長年ご貢献されてきた方々に深く感謝の気持ちをこめて、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰を行います。本日表彰を受けられる皆様には心からお祝い申し上げます。

そして今日は、未来を担う子どもたちにも来ていただいております。３Ｒ促進ポスターコンクールにおいて、約5,300点の応募作品の中から見事最優秀賞を受賞された小学生、中学生の皆さんです。本当におめでとうございます。

第二部では「循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション」をテーマとしたシンポジウムを行います。今後の私たちが進むべき方向性について、ご講演、ご議論をいただきます。環境省としては、来年６月の閣議決定を目指して、現在第五次循環型社会形成推進基本計画の見直しに向けた検討を進めております。循環型社会の実現に向けて、今後どのような取組が必要なのか、本日ご参加の皆様が、それぞれの立場でお考えを深めていただくきっかけになれば幸いでございます。

本大会は４年ぶりの対面でのリアル開催となります。対面でのリアルな出会いと交流を通じ、そして共感を分かち合い、ご参加いただいた皆様の知恵と知恵とを繋げておこすイノベーションによって循環型社会形成の先にある明るい未来と皆様ひとりひとりの幸せが広がっていくことを心から祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

本日はどうかよろしくお願いいたします。

●神部秀行氏（秋田県副知事）

ご紹介いただきました神部でございます。本日第17回３Ｒ推進全国大会がご来賓の皆様方をはじめ、全国各地で実践的な活動を展開しておられます多くの皆様にお集りいただき、盛大に開催できますことを、深く感謝申し上げますとともに、秋田にお越しいただいた皆様に心から歓迎申し上げます。また、本大会を開催するにあたり、ご尽力を賜りました環境省、３Ｒ活動推進

フォーラムをはじめ関係団体の皆様に、厚くお礼申し上げたいと思います。そして本日、これまでのご功績により表彰を受けられます皆様に、心よりお祝い申し上げます。

ここ秋田県は、今年12月に、登録から30周年を迎える世界自然遺産白神山地をはじめ、十和田八幡平国立公園、鳥海・栗駒・男鹿の３つの国定公園と８つの県立自然公園を有しており、生態系や生物の多様性を抱く豊かな自然に守られ、その恵みの下で日々の生活を営み、多彩な産業、伝統文化を育んでまいりました。このような秋田を次世代へ継承するために様々な環境保全対策とともに、かつて栄えた鉱山の施設や技術を現代の社会に活用した金属リサイクルにいちはやく取り組むなど、本県のもつ資源や技術、人材等のポテンシャルを最大限に活用し、県民・事業者・行政が一体となって循環型社会の形成を推進してきたところであります。

現在、地球規模での気候変動や、プラスチックごみによる海洋汚染、食品ロス等が国際的な課題として顕在化してきており、その解決に向けて、循環型社会の構築と、2050年のカーボンニュートラル、これの同時達成が必須となっており、国レベル、世界レベルでの取組が求められております。こうした取組がしっかりと地に根付いたものにしていくためには、国や世界といった大きな枠組みでのアプローチのみならず、身近な社会から変えていくことも重要であり、ひとりひとり、あるいは地域レベルでの取組も必要なことであると考えております。

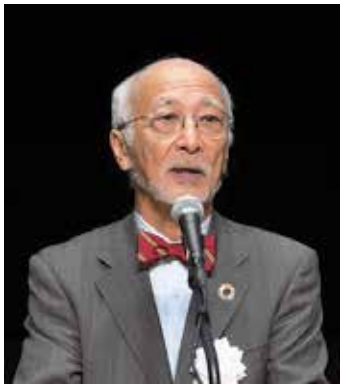
立ち止まって考えてみれば、ごみの分別、中古品のリサイクルはもとより、マイバッグ、マイ箸、贈答品のカタログ化、てまえどりなどが徐々に定着し、エコカーも随分普及し、ペーパーレスやシェアリングエコノミーも拡がりをみせてきております。

こうした流れをより大きなものとしていくために、それぞれの地域で様々な取組がなされていると思いますが、秋田県においては今年度、地元新聞社とタイアップした３Ｒの先行事例の紹介、あるいは、スーパーと連携したマイボトル運動などに取り組んでおります。

さらに、環境省のモデル事業を活用いたしまして、食品小売店での売れ残りを少なくしたうえで、それでもなお発生する食品廃棄物を再生利用することで、食品廃棄ゼロエリアの創出を目指したり、これまで焼却処分していたプラスチック製トレイ・バケツを一括回収してペレット等に再商品化する実証事業に取り組むなど、ひとりひとりの行動変容につながる取組や、資源循環を社会実装する取組を官民連携のもとで進めております。

本日は記念シンポジウムとして「循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション」をテーマに、３Ｒ・循環経済に関する講演や、３Ｒの最前線で活動されている方々によるパネルディスカッションを予定しております。循環型社会の実現に向けて、新たな気づき、価値の創造に繋がるよう、ここ秋田から発信し、そしてそれぞれの地域で具体的なアクションに繋がることを期待申し上げたいと思います。

この大会が実り多きものとなり、今後３Ｒ活動がさらなる拡がりに繋がることと、本日お集りの皆様のご健勝ご活躍をお祈り申し上げまして、開会の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。



●細田衛士氏（３Ｒ活動推進フォーラム会長）

皆様、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました３Ｒ活動推進フォーラム会長の細田でございます。本日は第17回３Ｒ推進全国大会の開催にあたり、全国から沢山の方々にご参加をいただきまして、主催者の一人して心から御礼申し上げます。また、近年新型コロナ感染症の防止の観点から、会場にお越しいただいて実施する通常の開催は長く控えておりました。今回は令

和元年以来の対面の開催となり、一層感慨深いものがございます。

本日は、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰を受賞される皆様方、そして３Ｒ促進ポスターコンクールで最優秀賞を受賞される皆様方、誠におめでとうございます。今回の受賞を機会に、さらに３Ｒ活動を推進されますことをご期待申し上げる次第でございます。３Ｒ推進全国大会は、環境省および自治体のご協力を得て、10月の３Ｒ推進月間に開催しているものでございますが、今年の第17回大会は秋田県の皆様の多大なるご協力により、このあきた芸術劇場ミルハスで開催することができました。ご努力を賜りましたことを、秋田県の皆様方に心から御礼申し上げる次第です。本当にありがとうございました。

さて、３Ｒ活動推進フォーラムでございますが、平成18年に設立されました。そのきっかけは平成16年６月にアメリカのシーアイランドで開催されましたＧ８サミットで、当時の小泉首相がごみの発生抑制リデュース、そして再使用リユース、再生利用リサイクルの３Ｒを通じた循環型社会の形成を目指す“３Ｒイニシアティブ”を提唱し、世界で合意されたことにあります。平成17年には、我が国は３Ｒを通じた循環型社会の構築を国際的に推進するための日本の行動計画「ゴミゼロ国際化行動計画」を発表しました。こうした動きを踏まえ、我が国の３Ｒに関する社会的取組や循環型社会への変革のための３Ｒ活動の一層の推進のために、それまでの「ごみゼロパートナーシップ会議」を拡充発展させ、環境省のご指導のもと、平成18年１月に３Ｒ活動推進フォーラムが発足したと、こういうわけでございます。

当フォーラムの会員は、今年度これまでのところ４団体増えまして、現在自治体が79会員、民間団体が66会員、合計145の団体で構成され、具体的な活動といたしましては、本日開催の３Ｒ推進全国大会、小学生を対象にした３Ｒ促進ポスターコンクール等のほか、自治体や民間団体と連携いたしました３Ｒセミナー等、３Ｒ活動を全国で積極的に展開しております。

令和４年４月にはプラスチック資源循環促進法が施行され、プラスチック使用製品の設計から廃棄の段階に至るまで、プラスチックのライフサイクル全体に関わるあらゆる主体における取組を促進する支援措置が始まっております。また、環境省の皆様の様々なご努力に加えて、最近経済産業省でも“成長志向型の資源自律経済戦略”を本年３月に公表いたしましたが、従来からの３Ｒに加えて、資源の消費を最少化する循環経済に移行することが重要とされております。さらに、循環経済への移行を推進することは、環境負荷を低減し、温室効果ガスの排出削減による脱炭素化社会の実現にも貢献すると私は思っております。

このようなことから、３Ｒ活動推進フォーラムの役割も従来の役割にとらわれない幅広い観点で環境省・自治体・企業・ＮＰＯ団体との連携を一層強化し、啓発普及活動を進めていくことが求められております。今後とも循環型社会形成、資源循環の実現に向けて、活動を推進してまいりますので、皆様の一層のご協力を賜ることをお願いいたしましてご挨拶とさせていただきます。今日はよろしくお願い申し上げます。

（２）来賓挨拶

●北林丈正氏（秋田県議会議長）

皆様こんにちは。只今ご紹介をいただきました秋田県議会議長の北林丈正でございます。本日第17回３Ｒ推進全国大会が、全国各地からここ秋田市に大勢の皆様がお集りになり、このように盛大に開催されましたことに対し、県議会を代表し心よりお喜び申し上げますとともに、皆様のご来県を心から歓迎いたします。また、後ほど栄えある表彰を受けられる皆様におかれましては、循環型社会形成のためにご尽力いただいておりますことに深く敬意を表しますとともに、心からお祝いを申し上げます。

さて、私たちの生活は豊かで物に溢れ、何不自由ない便利なものとなりま

したが、一方で、地球温暖化や海洋汚染、資源の減少等、様々な環境問題に直面しております。これらの問題を克服して、すばらしい自然環境を次の世代にしっかりと引き継ぐためにも、生活スタイルを見直し、循環型社会へと転換する取組を社会全体で推進していく必要があると考えます。近年、３Ｒの取組を目にすることが増えてまいりました。事業者による大規模なものから学校や自治会など地域に密着したもの、さらには個人ひとりひとりによる取組等ございますが、そのすべての活動が社会全体の大きな動きの一部であり、いずれも欠かすことができない重要な取組であります。このような中、本日開催されます本大会では、３Ｒや循環型社会に関する基調講演、パネルディスカッションが行われるほか、先進的な取組の展示等が行われます。本大会が皆様にとりまして有意義なものとなり、持続可能な循環型社会の形成に向けた取組が社会全体で一層進みますよう、さらなるご活躍を期待いたしております。

また、ここ秋田は世界自然遺産白神山地に代表される雄大な自然に恵まれたところであり、ちょうど紅葉の時期も始まりました。この、自然に根差した伝統や文化等、多くの見どころがあり、県外からお越しの皆様には本日はぜひ、豊かな自然が育んだ郷土料理や美味しい地酒を楽しんでいただければと思います。

結びに、この３Ｒ推進全国大会の開催にあたりご尽力いただきました関係者の皆様に深く敬意を表しますとともに、本大会の成功とご臨席の皆様のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、大会にあたってのお祝いの言葉といたします。本日は誠におめでとうございます。

（３）表彰式

●令和５年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰

循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰は、先駆的又は独創的な取組により、循環型社会の形成について顕著な成果を上げている企業、団体又は個人に対して、環境省が毎年表彰しているもので、令和５年度は、個人１件、団体５件、企業５件が大会で表彰されました。受賞者と功績内容は以下の通りです。

３Ｒ活動推進功労個人

推薦者	氏名等	功績内容
宮崎県	詠田　トキ子	環境問題に取り組む市民団体を設立する等、約 30 年にわたり県内の環境問題への取組を支え、現在も環境アドバイザーとして県内で出前講座等を実施。平成 30 年からは宮崎県４Ｒ推進協議会会長に就任し、県内の４Ｒの普及に大いに尽力した。

３Ｒ活動推進功労団体

推薦者	氏名等	功績内容
秋田県	炭やきで夕日の松原まもり隊	平成 14 年から秋田県立大学周辺の松林において、松くい虫が寄生する枯木を探索し、伐採、炭化している。できた炭は参加者等への配布や道の駅で販売している。活動の継続により松枯れ被害量は減少する成果を上げている。
東京都	一般財団法人杉並正用記念財団	本団体は、昭和 40 年代、杉並清掃工場の建設に関連して起きた「東京ごみ戦争」の当事者が母体。設立の昭和 55 年から、近隣小学校を対象とした環境作品展の実施、さらに地域の環境保全やコミュニティの維持などで功績をあげている。

奈良県	特定非営利活動法人関西ワンディッシュエイド協会	平成18年から活動を開始し、平成20年からは毎月もったいない食器市を 200～300 人の参加者で開催し、生駒市や奈良市との協働事業に発展した。また、食品加工施設から排出されるサツマイモの端材の商品化を進めるなど、食品ロス削減の取組も実施している。
熊本県	一般社団法人 BRIDGE KUMAMOTO	平成 28 年の熊本地震の被災地家屋で使用されたブルーシートを再利用して、デザイン性の高いトートバックを、被災した縫製工場や就労継続支援事業所で製造してもらい販売している。売上の一部を被災の支援団体へ寄付するとともに、活動を全国の被災地域に広めている。
熊本県	熊本農業高校畜産科養豚プロジェクト	平成28年から、近隣の食品企業の協力のもと食品廃棄物を利用して、豚の発育段階に応じたエコフィード（餌）を開発。企業と畜産農家の仲介役を務め、令和２年からは 14 軒の畜産農家にエコフィードを提供。食品廃棄物を年間250 トン削減し、飼料経費の削減による所得向上に貢献している。

３Ｒ活動優良企業

推薦者	氏名等	功績内容
青森県	カットショップショーン	平成９年の美容院の開店時から、施術方法の見直しによる薬剤の使い過ぎの防止、容器包装の簡素化した商品を使用し、お客様へも推奨をしている。さらに、希望したお客様の頭髪をヘアドネーションへ寄付する等、お客様も巻き込みながら廃棄物減量に取り組んでいる。
秋田県	エコシステム秋田株式会社	平成 30 年度より東北地方等で排出されるリチウムイオン電池を受入れ、熱処理、破砕、選別により、アルミ、鉄、銅や、コバルト、ニッケル、リチウム含む黒色粉体を回収している。
京都府	株式会社斗々屋	平成29年よりごみを出さない「ゼロ・ウェイスト」を掲げた日本で初めてのスーパーマーケットを開業。繰り返し利用できるびんなどをお客様に持参、又はレンタルしていただき、量り売り形式で食品を販売するほか、ゼロ・ウェイストショップの開業サポートも実施している。
岡山県	ＪＦＥ条鋼株式会社水島製造所	平成20年から、自治体が集めた使用済み乾電池を受入れ、主に鉄、マンガン、亜鉛を回収。現在までに６万トンを再資源化している。また令和３年からは難処理物であるスプリングマットレスを再資源化。さらに平成 30 年の西日本豪雨の災害廃棄物の処理を受け入れるなど資源の有効活用と地域の復興に貢献している。
鹿児島県	株式会社丸山喜之助商店	平成 19 年から事業所から排出される売れ残り弁当などの食品廃棄物のたい肥化を開始。その後取組規模を拡大し、平成25年度からは、日置市市内全域の家庭を対象に生ごみのたい肥化を実施している。これまで処理した生ごみは 6,500ｔを超え、約 300ｔのたい肥は地元自治会や農家に無償で還元している。

循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰の表彰式

●令和５年度３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

３Ｒ促進ポスターコンクールは、環境省と３Ｒ活動推進フォーラムが全国の小学生と中学生を対象に、３Ｒを促進するための普及・啓発用ポスターを公募し、優秀な作品を選考・表彰することにより、国民一人一人が循環型社会のあり方について考えるきっかけにすることを目的としています。募集は令和５年５月23日～９月８日の期間に行われ、小学生低学年の部627点、同中学年の部1,821点、同高学年の部1,650点、中学生の部1,214点、合計5,312点の応募があり、各部門で、最優秀賞１点、優秀賞３点、佳作10点を選定し、大会で最優秀賞の表彰を行いました（中学生の部のみ、優秀賞は２点としました）。なお、大会会場では入賞作品のパネル展示も行いました。最優秀賞受賞作品は以下のとおりです。

◆小学生低学年の部
愛知県安城市立
安城東部小学校1年
菅沼　采峯さん

◆小学生中学年の部
群馬県伊勢崎市立
赤堀南小学校4年
福田　夢來さん

◆小学生高学年の部
愛知県刈谷市立住吉小学校５年
松田　永羽さん

3R促進ポスターコンクール表彰式

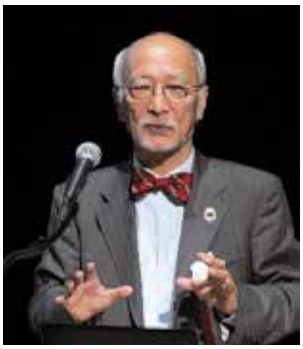
◆中学生の部
熊本県南阿蘇村立南阿蘇中学校３年
吉原　ひよりさん

３． 記念シンポジウム

循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション～2050 年カーボンニュートラルの実現に向けて～

（１）基調講演「３Ｒ・循環経済の加速化に向けて」

３Ｒ活動推進フォーラム会長、東海大学副学長・政治経済学部経済学科教授、
慶應義塾大学名誉教授、中部大学名誉教授　　細田 衛士 氏



（略歴）

1977 年慶應義塾大学経済学部を卒業。1994 年同学部教授、2021 年中部大学副学長、2022 年東海大学副学長となり現在に至る。大学で「環境経済論」を教えるかたわら、環境省中央環境審議会、経済産業省産業構造審議会委員などを務めた。廃棄物やリサイクルの問題などを経済学の観点から分析し、循環型社会のあり方を検討している。

●廃棄物リサイクルの足取り

皆さん、こんにちは。基調講演は「３Ｒ・循環経済の加速化に向けて」というタイトルでお話をさせていただきたいと思います。３Ｒ・循環経済をどのように進めて行くかという点について、私の基本的な考え方をお話します。そのことをお話する前に、私たちがこの循環経済の道をどうやってたどってきたかというお話をしたいと思います。歴史を学ぶ、私たちの足取りを素直に振り返ることはとても大事なことで、それがあるからこそ、将来に向かって新しい一歩を踏み出すことができると思っています。

図１

廃棄物リサイクルに関して私たちはどのような足取りをたどってきたかと言いますと、太平洋戦争あるいは世界的に言うと第二次世界大戦の後から振り返ります（図１）。戦争で破壊された日本が復興する、その大きなきっかけとなったのが高度経済成長という時代です。1955 年頃から 1970 年頃、15 年以上にわたって、実質の経済成長率は 10%でした。今は低成長、ゼロ成長の時代ですが、インフレ率を除いて実質 10%で成長した時代があったわけです。

この時代は戦後の復興の時代で、大量に生産して大量に蓄積して大量に消費するという時代でした。そうすると当然、大量に廃棄物が出てきます。大量廃棄の時代です。それでもまだ最終処分場、ごみの捨て場所はありました。なにせ、いっぱい食べたいとか、持ち家に住みたいとか、そういう時代でしたから、大量生産に大量消費、大量廃棄は当たり前のことでした。しかし、そうは言っても日々の生活で出てくるごみをどう処理するかというと、そんな簡単ではなかったわけです。

廃棄物処理のための法制度が実態に追いつかず、様々な問題が出てきます。1970 年までは清掃法という法律があり、その後、高度経済成長のちょうど真ん中に廃棄物処理法という今の法律が出てきました。この頃、こんな言葉がありました。「ごみは文明のバロメーター」。若い方はこの言葉をご存じないかもしれません。私は子供の頃ですが、この言葉が耳に残っています。ごみを出すことが文明社会なのだと。たくさん生産し、たくさん消費し、たくさん廃棄することが立派なことだった。今から考えるととんでもないことが当時は当たり前だったのですね。当然ごみ問題が出てきてしまう。どう対応したかというと、焼却主義の時代になっていった。家庭から出るごみを中心とした一般廃棄物に関しては、とにかく清掃工場、焼却場を作って燃やしていく。実は、このごみの焼却処理は、歴史をひもとくと明治政府のときからの考え方でした。

日本は生ごみが多いので、放っておくと、特に夏場は腐敗して衛生的ではない。だから、焼却して衛生的にする。これは明治政府の考え方だったのですが、なかなかそうはいかない。そういうきっちり安全に焼却

する技術がなかったわけです。ところが、高度経済成長時代にはそういう焼却設備が出てきて、焼却の時代に入っていくわけですね。今でも私たちはその延長線上にあって、私たちの出す一般廃棄物の約８割は燃やされています。

その意味で、焼却すると埋立処分場は節約できます。ごみは燃やすと、大体５分の１から 20 分の１まで減るのでよかったわけですが、歴史の流れは恐ろしく、燃やせばよいという考え方が実は市町村の間にもずっと残っていました。横浜市の清掃工場に 15～20 年前に学生を連れて行ったときに、その清掃工場の人が、「リサイクルなんてやったってしょうがないですよ。燃やすのが一番効率的です」と言っていました。そんな時代もあったのですね。

しかし、それではさすがに立ちゆかなくなってきて、沼津市あたりから資源ごみという概念が出てきました。ごみは燃やしても残さが出てくるので、埋め立てる所はどうしても必要になります。それだったら、事前に選別してできるだけリサイクルに回しましょうということで、びん、缶、衣料品、紙などですが、「分ければ資源、混ぜればごみ」という概念がだんだん広がりました。他方、産業廃棄物関係で不適正処理、不法投棄が頻発しました。香川県の豊島で、自動車や家電製品などを裁断した後のダストが捨てられて大変な汚染問題を引き起こした。今でもまだまだ処理が続いています。

2000 年前後には、古紙の逆有償問題が起きました。これまで市民の皆さんが分別した紙を集団回収して、古紙問屋さんあるいは回収業者さんに渡すと、少しでもお金がもらえた。ところが、特に都会を中心に、古紙を渡すと、「処理料金をもらいますよ」という逆有償になって、みんなびっくりしました。古紙のリサイクルが滞ってしまって、どうしてこんなお金を払わなければいけないのかということで、何かギクシャクしている時代でした。

それを根底から変えていかなければいけないということで、市町村そして国を挙げての運動が起きてきたわけです（図２）。そこで出てきたのが、３Ｒ、リデュース・リユース・リサイクル、そして 1991 年には、再生資源の利用の促進に関する法律という今の資源有効利用促進法の前身の法律ができ、さらに 1999 年には「循環経済ビジョン 1999」ができました。

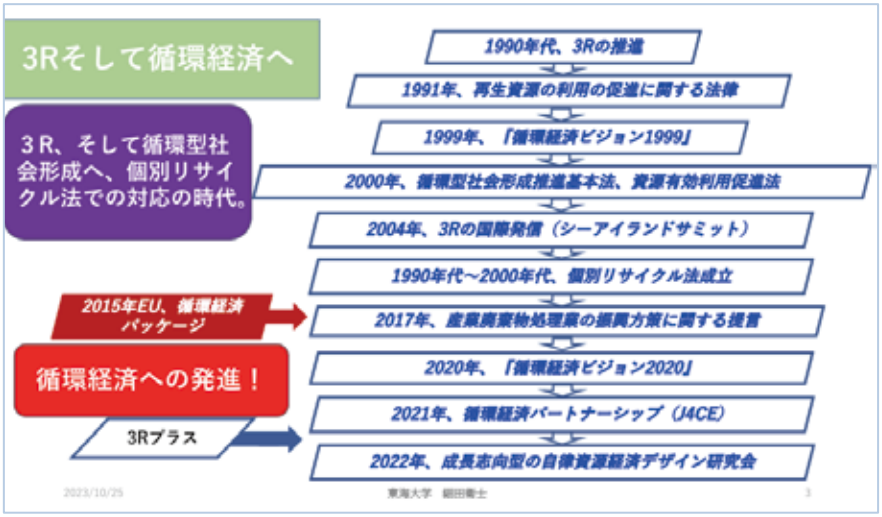


図２

EU が循環経済という言葉を提唱するのが 2015 年ですが、日本はそれより 16 年早く、循環経済という言葉を使っているわけです。ただまだこれは萌芽的な状態でした。そして、2000 年にようやく循環型社会形成推進基本法、そして資源有効利用促進法、そして 2004 年、小泉首相がアメリカのジョージア州シーアイランドサミットで３Ｒの国際発信をしました。

この辺から、我が国も腰を据えて、個別リサイクル法を次々に制定します。容器包装、家電、自動車、建設廃棄物、食品廃棄物、そして小型家電、最近ではプラスチック資源循環促進法もできました。さらに、2017 年に環境省は産業廃棄物処理業の振興方策に関する提言をまとめました。これは静脈産業、廃棄物リサイクルに関わる産業を根底から考え、捉え直して産業として位置づけようということです。

その前後に、2015 年、EU の循環経済パッケージという、循環経済の概念を基礎にして、エコデザイン指令やプラスチック指令というものを組み合わせて全体で考えるという考え方が出てきました。しかし日本ではもう循環型社会形成推進基本法で始まっているわけです。さらに 2021 年には循環経済パートナーシップ（J4CE）と始まり、2022

図３

年に成長志向型の自律資源経済デザイン研究会ができて、循環経済への発信がもう始まった。さらに３Ｒプラス再生資源、バイオを使った形で進めていくという総合的な対策がとられるようになったということです。

これをおさらいすると（図３）、まず初めに廃棄物処理法頼りで焼却主義の世界になりますが、これではまずいということで、分ければ資源、混ぜればごみということからリサイクルをしよう。それからそれをもっと徹底してリデュース・リユース・リサイクルに取り組み、まずリデュース、ごみにならないようなものを作りましょう。そして、できればごみになる前にリユースしましょう。ごみになってもそれを再生利用、リサイクルしましょう。さらにそれを社会全体で進めていく循環型社会、それにプラス経済的側面も、作っては壊す資本主義経済ではなく新しいグリーンな資本主義経済を作ろうという循環経済、サーキュラーエコノミーです。これは直線的に書いてありますが、実は前のものがなくなったわけではありません。分ければ資源、混ぜればごみという概念も重要ですし、ある程度焼却も大事です。焼却を今ゼロにすることはできません。３Ｒも循環型社会という発想も必要です。特にこの循環型社会と循環経済はどこが違うのかという質問があるかもしれませんが（図４）、私の考え方は基本的には同じです。我が国の循環型社会という考え方のいいところは、地域循環の視点が十分あることです。循環させるときに地域で循環させた方が自然なものがあります。生ごみや堆肥などがそうです。しかし鉄スクラップはなるべく広いところで循環させた方がよい。地域の循環が良いところもあるし、広域の循環がよい場合もあります。それを使い分けていく。地域循環は市民の目線です。私たち一人一人の行動が変容していかないと世界は変わりません。誰かがやってくれるというのではなく、私たちが始めるのです。

図４

最近ある有名な本を読みました。その本ですが、エコバッグやマイボトルは役に立たない、SDGs も役に立たない、有害でさえあると書いてある。マイボトルやエコバッグにすれば事は片付くことではないというのはその通りです。しかしそれが本当にいいかどうかというのは、その運動を長く進めてどういう効果が表れたかを考えないと、良いか悪いかとは言えません。だから有害でさえあるなんて言えない。なんと横柄な言い方だろうと思います。ちょっと戻しますが、循環型社会は地域の視点、市民の目線がある。ボトムアップは絶対に重要です。上から目線だけでものは片付きません。でも一方でやはり経済全体を変える必要があります。今のままの資本主義は持続可能ではありません。グリーンな資本主義に変えなければいけない。それが循環経済です。これは新しい経済作りであり、岸田首相の言うように新しい経済政策です。こちらはどちらかというとトップダウンでやる必要もあろうかと思います。

どちらにしろ、地域の循環、市民目線、それと、経済政策的なものが高度な資源循環という真ん中の破線のところで繋がっているわけで、それを推し進めるキーワードは、私はやはりリデュース・リユース・リサイクルだと思います。だって、皆さん、サーキュラーエコノミーと言っても何したらよいのかと思いませんか。リデュース・リユース・リサイクルは、はっきりしています。

仮に使用済みになったものがあったらリユースする。最近、NHK のニュースで見ましたが、若者が抵抗なくリユースをしていて、リユース市場がどんどん増えています。リユースにはもちろんエネルギー効率の問題はありますが、ごみにならないという意味では、ビジネスと環境

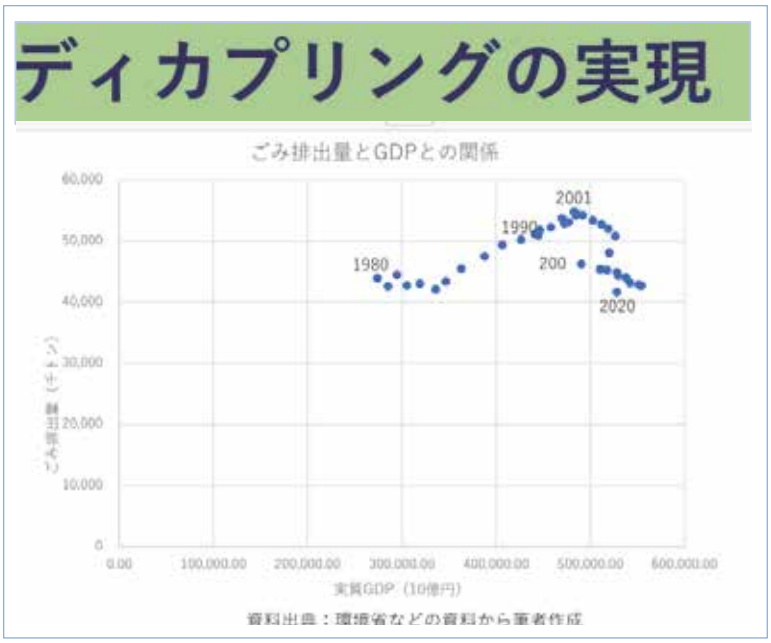


図５

がウィンウィンでいくということです。もちろんリサイクルも大事です。３Ｒは依然として重要なキーワードだと私は思います。

そんなことやっても意味がないという上から目線には、それは違いますと言えます。統計的に見ると（図５）、一般廃棄物ですが、右側が実質 GDP、縦軸はごみの排出量で、2001 年までは GDP が増えると、ごみも増えていますが、2001 年からは GDP が増えてもごみは増えていません。今でも減りつつあるわけです。これをディカップリングと言います。CO_2ではまだ言えないが、ごみの場合はこのディカップリングが成功しています。私たちの行動変容が明らかにもう世の中を変えています。これをもっと加速化しなくてはいけないというのが今日のテーマです。

これ（図６）は一般廃棄物の埋立処分場ですが、棒グラフの残余容量は下がっています。一方、黄色線の残余年数は増えています。残余容量が減って残余年数が増えたのはどうしてかというと、それだけ埋め立てることを止めているわけです。これも一つの大きな成功です。

これ（図７）は産業廃棄物です。産業廃棄物も埋立処分場の残余容量は明らかに減っています。だけど残余年数は下がっています。もう一歩努力が必要かと思いますが、長期トレンドで見てみると残余年数が増えている。私がこの循環経済を勉強し始めたときは、もう心許なかった。残余年数が３年とか言っていました。そういう状況からは今脱しつつあります。ただ、この流れをもっともっと強くしていかなければいけません。

これ（図８）は食品ロスの推移ですが、直近のデータですと 520 万ｔぐらい。2012 年度には 640 万ｔぐらいあったのですが、これも長期トレンドでは減っています。これは食べられるのに捨てられている食品ですね。国連食糧計画が年間に途上国に援助する食物の量が約 400 万ｔと言われています。我々はそれをはるかに超える量を捨てているわけです。これは良くないです。パフォーマンスはだんだん良くなっているので、これを一層強めて食ロスをなくさなければいけません。

●困った問題

私たちが一致協力してまだ解決しなければいけない問題がいっぱいあります。幾つか挙げると、まず、リチウムイオン電池問題（図９）。これは本当に便利で、発明した吉野先生はノーベル賞をもらったのですが、使っているときの便

図６

図７

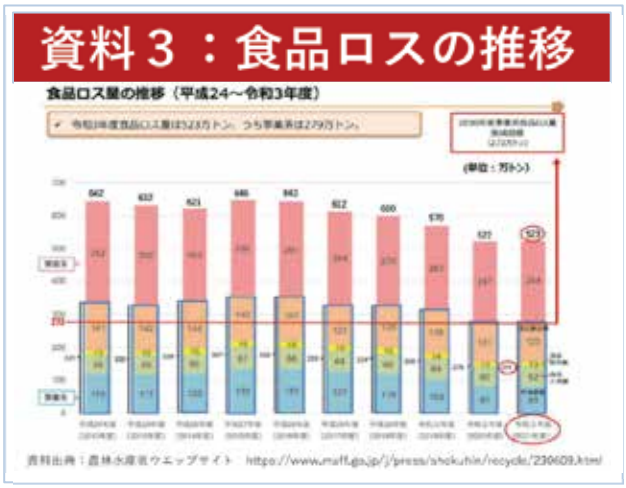


図８

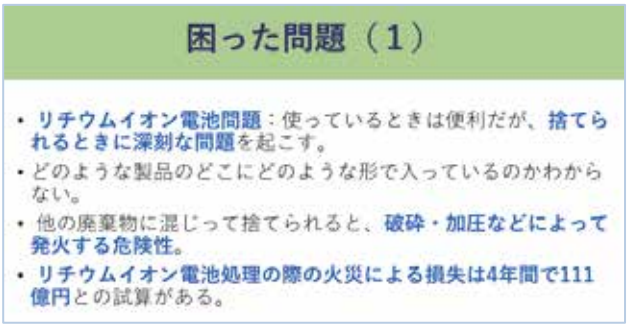


図９

利なものは大体捨てるときには不便です。よく食品で美味しいものは大体健康に良くないと言いますね。イクラとかウニは、コレステロールでは良くありません。便利なものもよくない。真夏に若い女の子が小さな扇風機を使っています。あれはリチウムイオン電池を使っています。使い終わってごみの中に入ったらどうなりますか。破砕とか加圧などによって発火する危険性や爆発することもあります。実際これでごみの処分場のプラントが止まったことがあります。その損失は、何と４年間で 111 億円という試算があります。

それから、便利だけれど捨てるときに困るものに石膏ボードがあります（図 10）。これはアメリカ軍がやってきたときに、石膏ボードは耐火性や防音性があり軽いので、日本の木造家屋に適しているということで使われました。だから、家屋が解体されると必ずと言っていいほど石膏ボードが出てくるのですが、ほとんどリサイクルされません。石膏ボードは埋め立て処分することが前提のものです。これはやはり困りますよね。

それから、先ほどプラスチック資源循環促進法の話をしましたが、使用済みのプラスチックはマテリアルのリサイクルが日本ではほとんどできていない（図 11）。数%です。ほとんどが熱回収。最近はサーマルリサイクルという言葉を使いません。リサイクルじゃありませんので。やっぱりこれはまずい。部分的にはサーマルリカバリーはよいが、将来にわたってカーボンニュートラルにしていくためには、燃やすというオプションを減らさなければいけません。そうすると、プラスチックをどうやって循環利用するかは大きな問題です。

これらの問題を考えるときに、困った問題の４番目（図 12）は廃棄物処理。リサイクルする事業者の中には、優良な事業者さんもいるが、そうでない人もいます。廃棄物処理法を守らない、個別リサイクルを守らないで、安かろう悪かろうという処理をして環境を破壊する、不法投棄してしまうリサイクラーがいる。そういう人が廃棄物を持って行くと優良な事業者に廃棄物が渡らなくて、環境が破壊されて

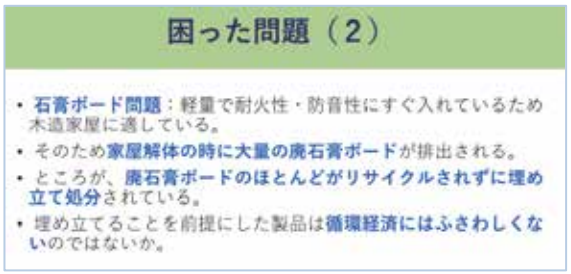


図10

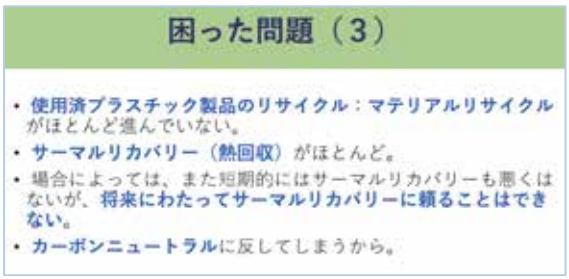


図11

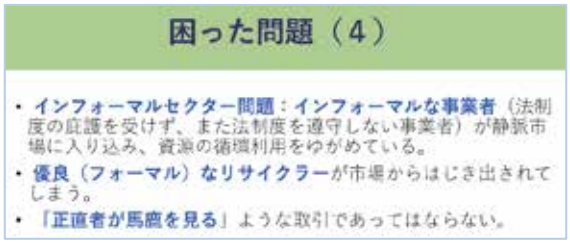


図12

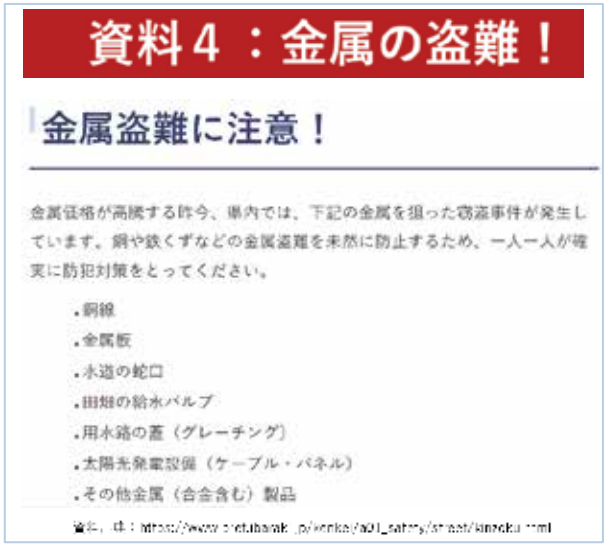


図13

しまうという問題が起こる。この問題は、何とかしなければいけません。

現実にこんな問題があります。今ウクライナ問題で金属資源価格が高くなっていますが、鉄とかアルミとか銅が盗まれています。これは（図 13）茨城県警のウェブサイトから持ってきました。水道の蛇口であるとか、田畑の給水バルブまで持って行く。電線を切り取る人まで出ている。これはインフォーマルな人がやっている。こういうことが現実に起きているわけです。これは、銅の価格が上昇しているこ

図14

とを見れば、おわかりになると思う（図 14）。資源が枯渇するという人がいますが、これはなくなりません。なぜかというと、市場経済が働く限り枯渇すると資源価格が高くなり、使えなくなってくる。でも将来世代も使わなければいけない資源があるので、これは節約し、循環利用する必要があります。そして、そのときに循環経済を加速化しなければいけない。３Ｒを加速するためには、先ほど言った循環経済と循環型社会を、合わせて同期させることです。

●ドライビングフォースは３Ｒ

経済生活はもちろん重要です。経済構造も重要です。社会もある。家族もある。この地域コミュニティもある。その中で資源の循環利用が進んでいきます。経済の部分、社会の部分、市民生活も全部それに関わっています（図 15）。文化、歴史、伝統、慣習というもので、私たちは高度のリサイクルをやっている。その中に経済構造を変えるということが今度入ってきます。そうするとやはりその根底にあるのは３Ｒで、３Ｒを基軸として循環経済、サーキュラーエコノミーを加速させるということが大事になってきます。先ほども言いましたように、循環型社会や循環経済はどちらかというと、経済全体、社会全体の問題でマクロな概念です（図 16）。これは国の施策の部分が非常に大きい。企業の役割も起きい。

一方、３Ｒは個別主体、私たちの行動原理ですからミクロです。ミクロとマクロを繋げる、その接点に３Ｒが位置づけられるわけです。循環型社会や循環経済を構築するための非常に大きなドライビングフォースになるのが３Ｒです。もちろん３Ｒの根底にあるのは、まずリデュース・発生回避、再使用・リユース、それから再生利用・リサイクルで、それができなければ熱回収・サーマルリカバリー、そして最終処分（図 17）。再生利用の中でもまずはマテリアルで回す。それからケミカル・化学的にリサイクルする。あるいはサーマルリカバリーしたとしても CCUS（大気中の二酸化炭素を回収、有効利用する技術）を活用する。

繰り返しになりますが、「資源の高度な循環利用に向けた経済社会改革」と「３Ｒに基づいた市民の活動」は合わさっていかなければいけない（図 18）。だから例えば、国の施策としての拡大生産者、生産者が廃棄物になった段階でも責任を取る環境配慮設計を行う。そういう施策的な部分と、市民が行動して地域循環を行う、排出者責任を果たす。これがカップリングしなければならない。繋がっていかなければいけないというわけです。それで初めて循環経済、循環型社会ができてくる。

このためには、従来の資本主義社会ではビジネスによって人と人とが繋がっていくが、もちろんビジ

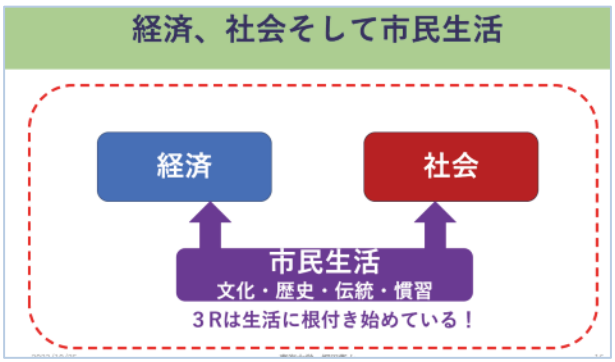


図15

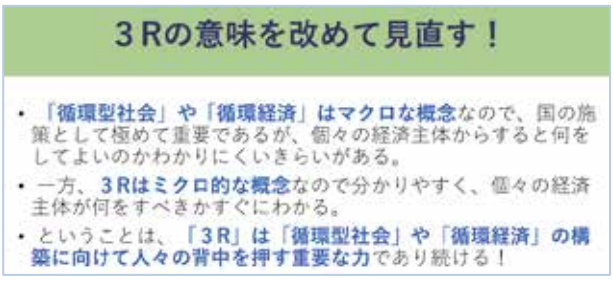


図16

図17

図18

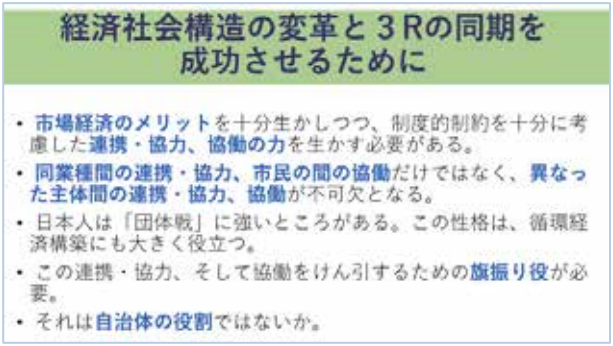


図19

ネスは絶対必要ですが、それを超えて、連携・協力、協働の力が必要になってくる（図 19)。

それは、例えば同業種間の連携協力、市民の間の協力もあります。でもそれだけではなくて、企業と市民の協力、自治体との協力という異なった主体の協力が、私はこれからますます重要になってくると思う。それが新しい資本主義を作ると思う。もう私益だけではない。公益の部分が大事です。私益と公益が繋がる、私益はもちろんつぶしては駄目です。そのための旗振り役は、市町村の役割、自治体の役割、県の役割がとても大事になってきます。絵で描くとこんなことですね（図 20)。

図20

サーキュラーエコノミーの実現というのは、もちろん国が基盤となって、トップダウンでいろんなことやっていかなければいけないですが、自治体はコーディネーター、NGO、消費者、企業、公益組織、それからわれわれ大学、こうした教育組織が連携協力する。これは資本主義社会では自然な形で繋がりません。こういうのを意図しないといけない。それがまだまだできてない。だからリチウムイオン電池問題とかいろんなバラバラな問題が起きてしまう。

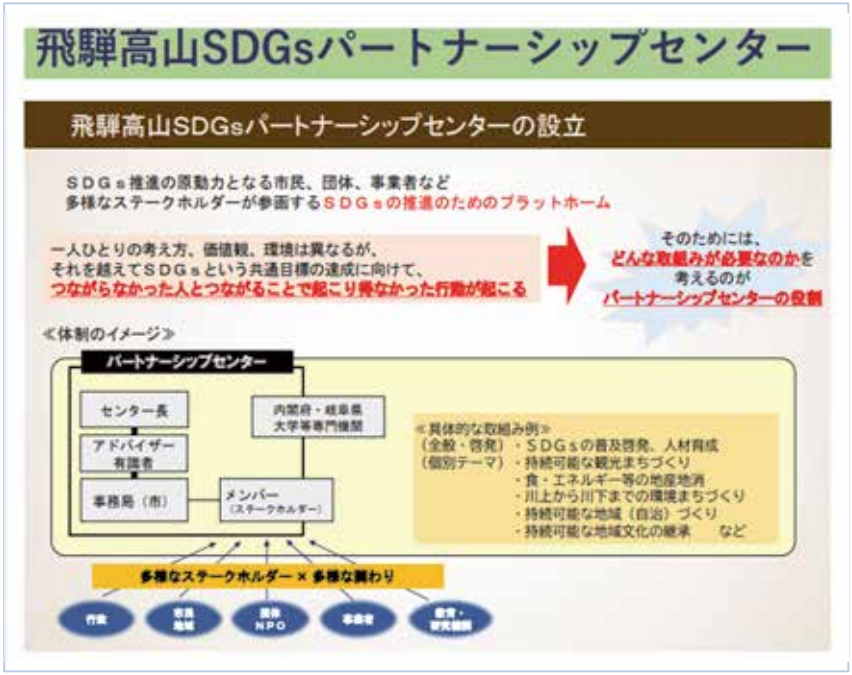


図21

この繋ぐことが今後大事になってきます。その繋ぐ例をいくつかご紹介します。

これ（図 21）は、私がセンター長をさせていただいている高山市の例で、飛騨高山 SDGs パートナーシップセンターというのがあります。これは、NGO の皆さん、地元の土木業者の皆さんとか企業の皆さん、学校の皆さんなどいろんな方

図22

が協力して、得意なSDGsの何番目かゴールを達成しようというもので、市民も参加しています。旗振り役は高山市です。市町村や県の役割がこれからますます大事になってきます。

それから、これ（図22）はワタミさんです。ワタミさんは、愛知県で様々な企業やNPOとも連携協力しています。さらに、この廃棄物処理法をどうやってクリアするかということで、もちろん、名古屋市や愛知県とも相談しながら、廃棄物処理法を守りながら、連携・協力で食品リサイクルループを完成させていこうという取組をしています。

循環型社会、循環経済を繋げる、そしてそれの基盤にある３Ｒ、今までの資本主義経済をさらに一歩進めて連携・協力の輪を作らなければいけない。それが循環経済です。さらにその先には循環経済によって経済も良くなってくるということがあると思います。

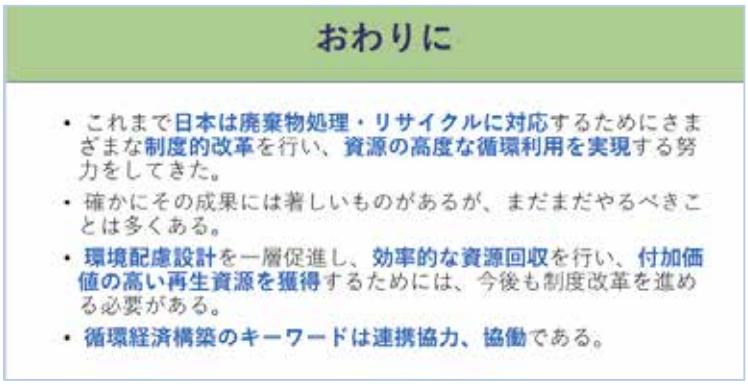


図23

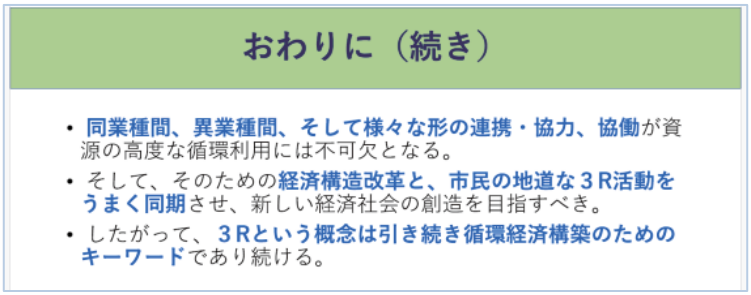


図24

最後になりますが（図23、図24）、これまで日本は、廃棄物処理・リサイクルに対応にするためにさまざまな制度的改革をやってきました。分ければ資源・混ぜればごみとか、３Ｒ、それから循環型社会形成推進基本法、そして循環型社会、循環経済、資源の高度な循環利用を実現する努力をさまざまにやってきました。先ほど資料でお見せしたように成果もありますが、まだまだやるべきこと、困った問題が残っています。

環境配慮設計を一層促進し、効率的な資源回収を行い、付加価値の高い再生資源を獲得するためには、今後も制度改革をどんどん進めていかなければいけません。新しい経済を作り上げる。これが私たちの両親があの戦後から復興させたのと同じように、私たちは環境を復興させなければいけない。

そしてそのための循環経済構築のキーワードは、連携・協力、協働であり、進めていくドライビングフォースは、私はやはり３Ｒが大事だと思っております。

時間が参りました。皆さん、ご清聴ありがとうございました。

（２）パネルディスカッション「循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション」

【コーディネーター】

・３Ｒ活動推進フォーラム副会長、特定非営利活動法人持続可能な社会をつくる元気ネット顧問　崎田 裕子氏

【パネリスト】

・秋田エコプラッシュ株式会社専務取締役　小泉 剛氏
・認定特定非営利活動法人環境あきた県民フォーラム理事長　佐藤 充氏
・総合地球環境学研究所教授　浅利 美鈴氏
・秋田県生活環境部環境整備課長　大門 洋氏
・環境省環境再生・資源循環局循環型社会推進室長　近藤 亮太氏

○崎田　よろしくお願いいたします。細田会長の基調講演の中で、最後に、循環経済を進めるには、３Ｒを徹底するための連携・協働が大変重要であるとバトンをいただきました。その辺のところを大事にしながらパネルディスカッションを進めていきたいと思います。

趣旨を一言申し上げると、秋田の皆さまは、この夏に水害で大変な思いをされたことと思います。全国的にも大雨の被害、異常な暑さが続いており、気候変動対策、CO_2の排出削減の徹底が私たちにとって、一層大事なことになって参りました。

環境省のデータの中で、日本のCO_2削減に対して、循環型社会作りが貢献できるのは 36%ある、とのデータを拝見しました。これまで３Ｒ推進に関わってきた多くの皆様とともに、もう一段、３Ｒを徹底するための新しいステージにどのように立っていくのか、共創とイノベーションというテーマでしっかりとお話をしていければと思います。

なお、環境省が今検討されている第五次循環基本計画の見直しの指針案が最近まとめられたので、そのホットな情報を後ほど環境省の近藤さんからお話をいただこうと思っています。そういうことも含めて、徹底的な資源活用、そして作り手と消費者、みんながそれぞれどのように取り組んでいったらいいのか、一緒に話し合っていければと思います。登壇者の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、それぞれ先進的に取り組んでおられますので、お一人ずつ現在の取組をご紹介いただき、それから意見交換をしていきたいと思います。では、まずは秋田エコプラッシュ株式会社専務取締役の小泉剛さんから取組をお話しいただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

○小泉　秋田エコプラッシュの小泉と申します。本日はよろしくお願い申し上げます。当社は秋田県北部、能代市にありますプラスチックのマテリアルリサイクラーです（図１）。家庭から出るプラスチックごみ、容器包装リサイクル材を年間で 4,500t 弱ぐらい処理をしています（図２）。その他に企業から出てくるプラスチックは 100%リサイクルができるもののみを、価値のあるプ

図１

図２

図３

ラスチックということで有価購入し、これを1,000t超リサイクルしています。材料化をしているだけではなく大型の射出成形機で最終製品であるプラスチック成計品まで製造しています。

企業理念（図３）は、「リサイクルを通して地球も人も豊かに」です。プラスチックは人の生活に欠かせない重要な資源で、この資源を使い続けるために日々活動をしています。

４・５は時間の関係で割愛させていただきまして、リサイクルのフロー（図６）を簡単に説明致します。家庭から出てくるプラスチックごみには色々なものが入っていて、汚れているものも沢山入っております。これを（選別）して（洗浄）して（破砕）して（溶融）して、ペレットを作ります。企業から出てくる資源プラスチック（図７）の一例ですが、大手流通企業が衣類を移動する際に使った軟質包材であったり、大手製パン企業の未使用の包材等を1,000t 超リサイクルしています。それを最終的にパレットや雨水貯留槽、これは駐車場の下や学校のグラウンドの下に雨水を溜める為のものですが、こういったものを（図８）作り変えています。

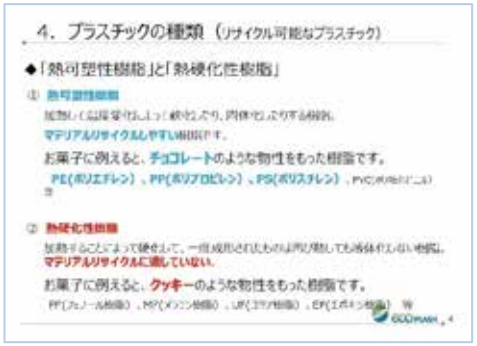


図４

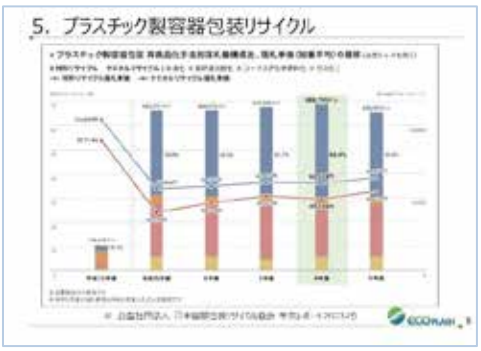


図５

本日、ぜひ皆さんにお伝えしたいことは、効率の良いプラスチック資源循環のためにはどうしたらいいのかということで、（図９・10）、リサイクルを前提とした包装材選定とか設計などについて、いろいろお話ができればと思っています。

最後に当社の環境への取組（図 11）についてご説明致します。リサイクルをしているから

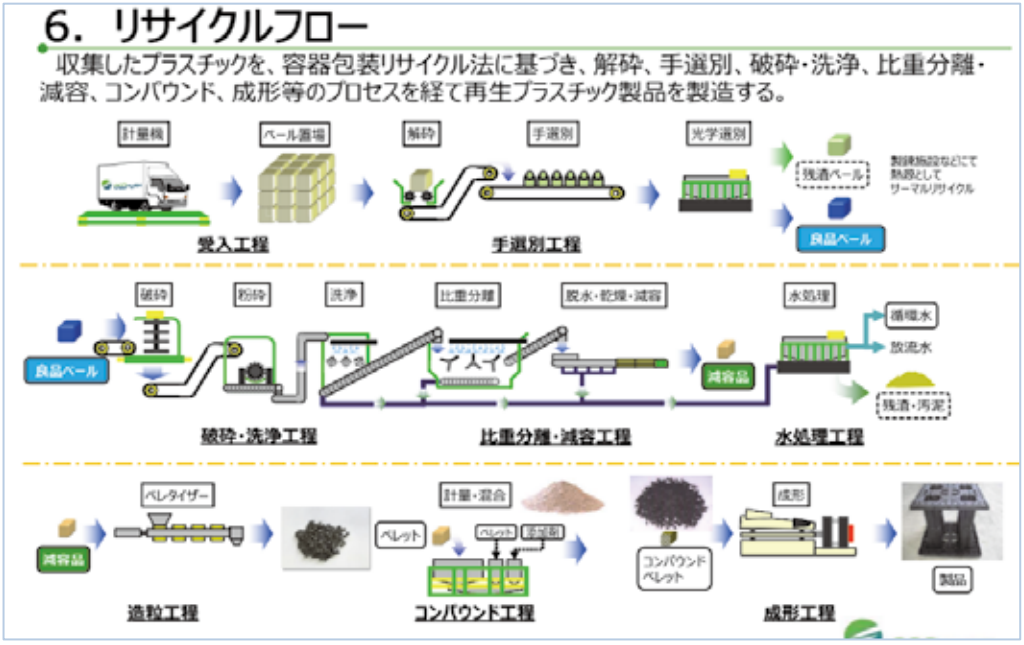


図６

といって二酸化炭素を大量に出してもよいというわけではありません。当社では秋田県産水力発電由来電力を全体の 75%使っています。年間で約 650 万 kWh 程の電気を使いますので、3,000t 前後の CO_2 を出しておりましたが、それを75%抑えるということができており、現在では 700t 台まで下げることができました。

また、プラスチックを生業としているので、プラスチックにより環境がどんどん悪くなってしまうことを何とかしたいという思いの下、ボランティア活動として海の清掃（図 12）を月に１回社員で行っています。これが（図 13）8 月に行ったものです。このときは大学の野球部の皆さんに参加していただいたので非常に多い人数となりました。

集めたプラスチックに関しては、小さい植木鉢を作って（図 14）、能代市内の小学校４年生の皆さんに配布しております。これは簡単に申し上げると、「能代の

図７

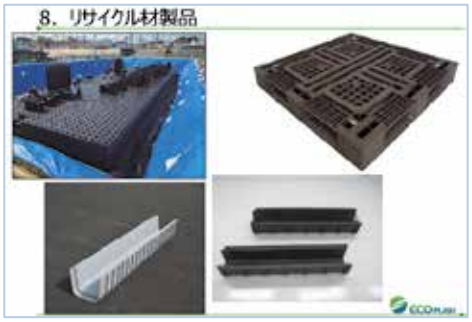


図８

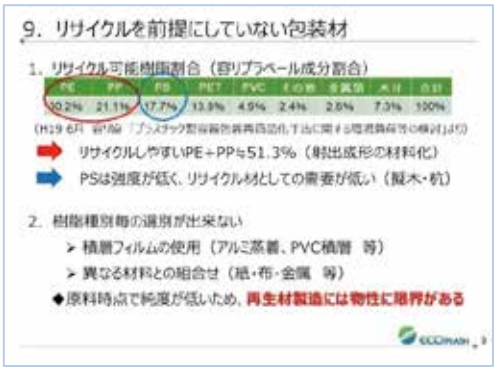


図９

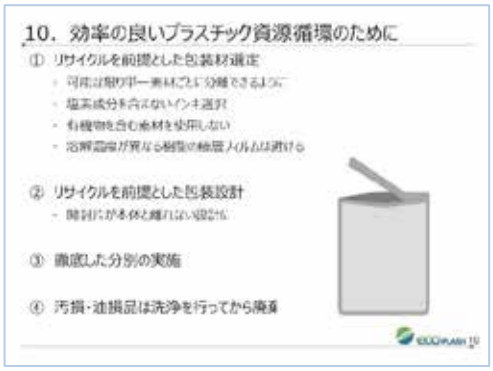


図10

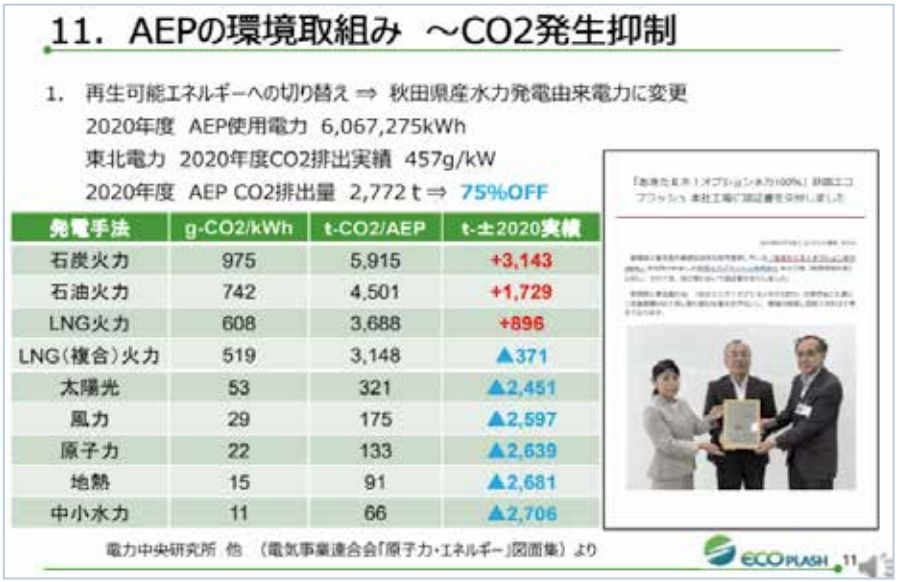


図11

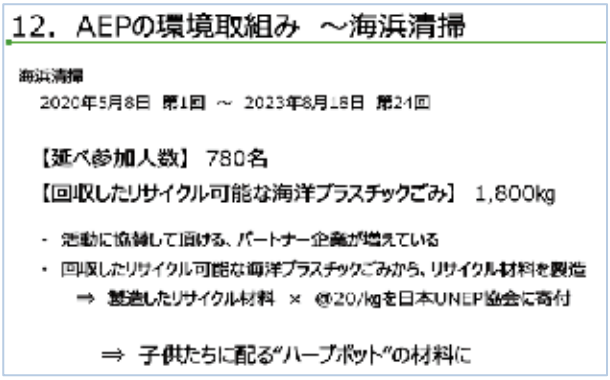


図12

図13

海が大変なことになっているよ。みんなが真剣に考えないと大変なことになってしまうよ」、そういうことを考えていただく為のきっかけの商品にできればと思いを込め、毎年皆さんにプレゼントさせていただいています。

図14

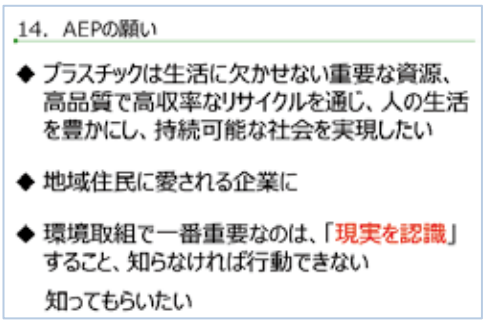


図15

最後に一番下（図 15）に書いてありますが、環境取組で一番重要なことは、一人でも多くの方に今の現実をきちんと認識していただくということであると考えております。人ごとではなくて自分のこととして考えていただくことにより、一層取組が進むのではないかと日々考えている次第です。

○崎田　はい、ありがとうございます。リサイクルを通して地球も人も豊かになっていくということで取り組んでいただいているというお話でした。それでは、次に認定特定非営利活動法人環境あきた県民フォーラム理事長の佐藤充さんからお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○佐藤　秋田市にあります認定 NPO 法人環境あきた県民フォーラムの佐藤です。どうぞよろしくお願いいたします。まず初めに私どもの団体を紹介すると、沿革ですが、2004 年に NPO 法人を設立して、同じ年に県から地球温暖化防止活動推進センターの指定を受け、現在も継続中です。それで 2019 年に認定 NPO 法人になりました。会員は正会員と賛助会員あわせて 200 の個人、団体、あるいは企業の皆様に入っていただいています。

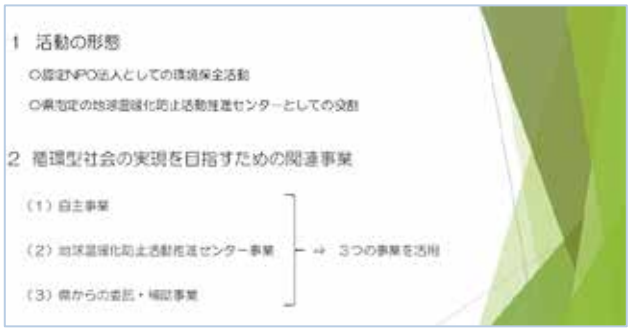


図１

その意味で活動の形態は、NPO 法人としての全般的な環境保全活動と温暖化センターとしての役割の二つの側面で活動しています。（図１）

二つ目は、循環型社会実現に繋がる関連事業として、ストレートにこの循環型社会のためにというものではないのですけれども、自主財源による自主事業、あるいはセンターとしての事業、それから県から受けている事業、この三つの事業を活用しながら、今回のテーマに沿った取組を進めています。

図２

具体的な取組ですが（図２）、普及啓発では、特にプラスチックごみに焦点を当てておりまして、令和元年度にはプラスチックごみの海洋汚染を取り上げて、切り口を雄物川から日本海への流出に着目して、どこまで行くのか、あるいはどのような状況か、どんな取組をしているのか、というようなことを中心に取り上げました。それで第２弾を続けて開催する予定にしていましたが、コロナの影響もあり空白があり、昨年度になりますが、令和４年度に第２弾として、「プラスチックごみと私たちの暮らし」をテーマに、プラスチックとど

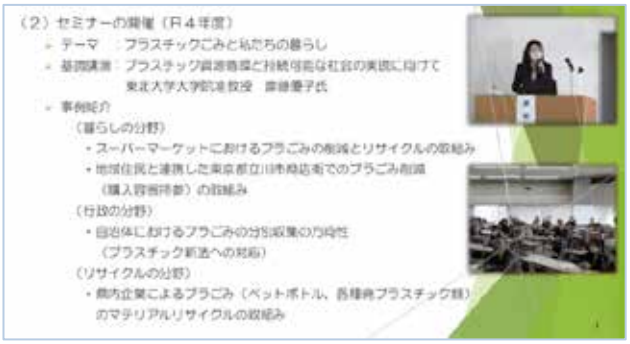


図３

う向き合うかということを浮かび上がらせるために開催しました（図３）。各分野での取組の現状をご紹介するというような中身になっています。

それから次は人材の育成（図４）ですが、いろんな活動されてる方々のスキルアップを図るために、リサイクル施設やバイオマス発電施設、さらに食品ロスの削減のための手立てということで地産食材をターゲットにした取組もしています。

それから地域の環境活動の支援（図５）ということで、町内会、あるいは婦人会などの団体が行う学習会などへの環境の達人の無償派遣ということで、現在３Ｒと循環型社会の分野を含めて、達人 40 数名をリストアップしています。関連する分野としては、地産食材によるエコクッキングが非常に人気があります。またもう一つは地域のエコ活動を行う NPO 団体等への助成金事業ということで、関連するものとして特にこれは新しい動きなんですけれども、ダイバーによる海底のごみも含めた海洋ごみの対策活動といったものも今動き始めています。

それから他団体と連携した全県的な環境イベント（図６）ということで、毎年、２万～３万人が来場する県内最大の環境イベントですが、今年で 21 回目を迎えました。当初はリサイクルを重視したネーミングになっていましたが、今回からはゼロカーボンを重視したネーミングと、それにふさわしい内容にして開催をしたところです。

それからいま一つは、認定リサイクル製品の展示ＰＲの事業（図７）ですが、この制度自体は県が 2004 年からスタートしています。現在の品目数は 30、製品数は 251 あり、品目数の多いのは、溶融スラグあるいはフライアッシュを使ったコンクリート製品、そしてまた、本県は林業県でもあるので、木を使った製品も特徴的かと思います。

また先ほどお話のあった秋田エコプラッシュさんのプラスチック資材もこの中に含まれています。今回会場の展示ブースの方にも、一部の製品を持ってきていますので、ぜひ後ほどご参考にしていただければと思います。

それで共創とイノベーションの視点から見た取組の整理ですが（図８）、最初の１から４番目までは共創をイメージした事業になる

図４

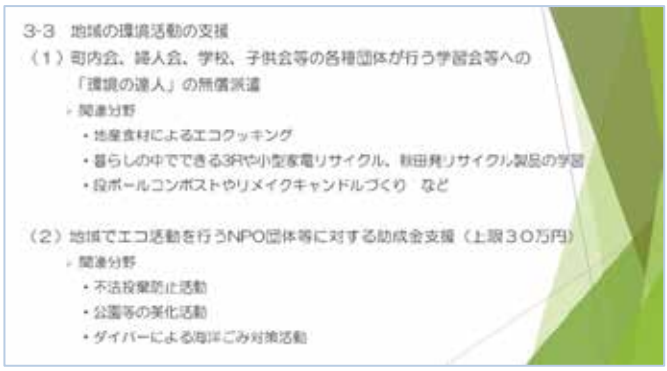


図５

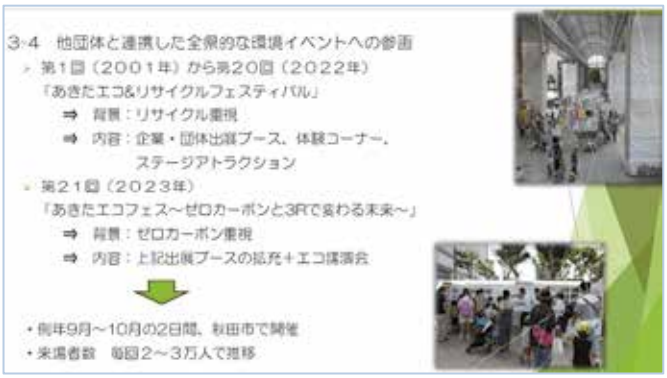


図６

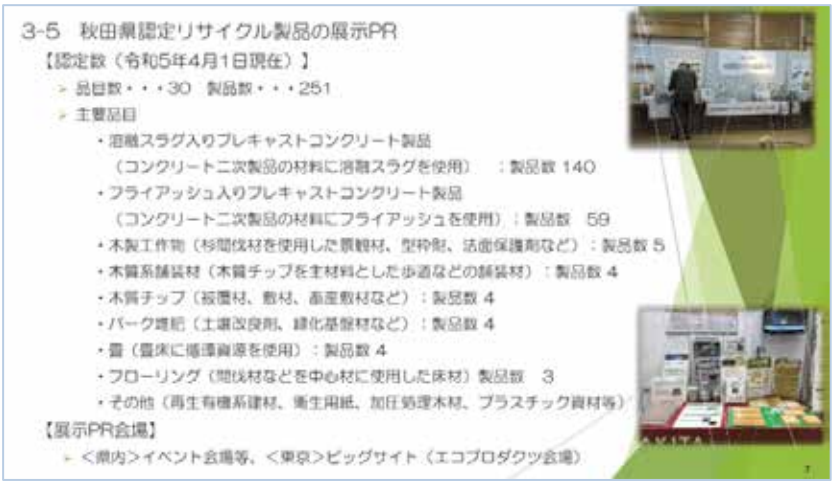


図７

と思いますし、リサイクル製品についてはイノベーションに関わるものと考えています。私どもは温暖化センターの役割を担っておりまして、カーボンニュートラルを目指し、この他にも色々な取組をしていますが、今日は直接的に循環型社会に係る部分を取り上げてご説明を申し上げました。よろしくお願いいたします。

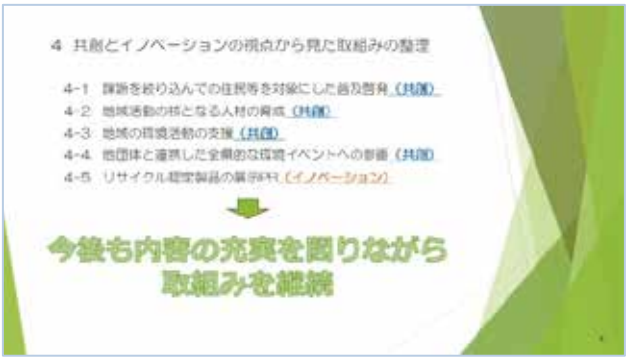


図８

○崎田　はい、佐藤さんありがとうございます。地域のさまざまな環境活動団体のまとめ役というお立場で、活動しておられることが大変よくわかりました。プラスチックとか食品ロスなどに積極的に取り組んでおられるということで、後ほど今後の展望と課題などを一緒に話し合っていきたいと思います。ありがとうございます。それでは、次は浅利美鈴さんです。京都大学で皆さんよくご存知の方ですが、総合地球環境学研究所教授に現在変わられたということで、どうぞよろしくお願いします。

○浅利　ありがとうございます。私もつい京都大学のと言ってしまいそうですが、京都にある地球研というところにおります。本日はカーボンニュートラル社会に向けて資源循環も含めた共創、自分自身でやっている事例もありますので、ご紹介したいと思います。少し自己紹介させていただきますと、４回生になってから、ずっと 25 年間ほどごみの研究を続けてきました（図１）。あともうひとつ、ライフワークとして環境教育とかコミュニケーションというのをしてきたのですが、秋田にもゆかりがありまして、私は入学してすぐに、体育会系のスキー部に入ってスキーに没頭しておりまして、実は１回生のときに、ここ秋田、鹿角で冬の国体があり、クロスカントリースキーの選手として出場しました。そのとき宿泊したペンションの方とは今でもずっと繋がりがあり、不定期ですが、訪れたり交流しています。

図１

ところが２シーズン目に入り、北海道での最初の試合で大怪我をして、半年ほど入院する羽目になりました。やむなく、もう一度キャンパスを見つめ直すことにしたら、京都大学キャンパスそのものが大変環境負荷が高いということにショックを受けまして、写真にある通り（図２）、「京大ゴミ部」なるサークルのようなものを立ち上げ、学内の環境教育や環境管理の啓発などを行い始めたというのが、この環境教育に関わるきっかけにでした。

図２

またこの写真にある通り、なかなか先生方を動かすのはとても大変で、若いときから変わらなければということで子供たちを集めて環境塾などをしてきました。また最近では小学生から SDGs を習っているということで、学校に出向いて、一緒にカリキュラムを作るという活動にも発展をしているところです。

図３

もう一点は、京都大学の頃の研究室では大学院だけの研究室におりまして、全員留学生でした。世界中のごみ研究を一緒に海外にも出向いてやっていたのですが、コロナでそうもいかないので、足元から何かできることはないかという中で、いわゆる地方の過疎化といった問題が実は京都でも起こっている

ということで、京都の京北という里山の地域に入り、そこで地域おこし的なことをさせていただいたりもしています。この写真（図３）の上にあるのは、とても綺麗なんですけれども廃校で、そこをリノベーションして、まさに SDGs の革新を起こしていきたいという思いで今、産学公連携で取組を行ったりもしています。

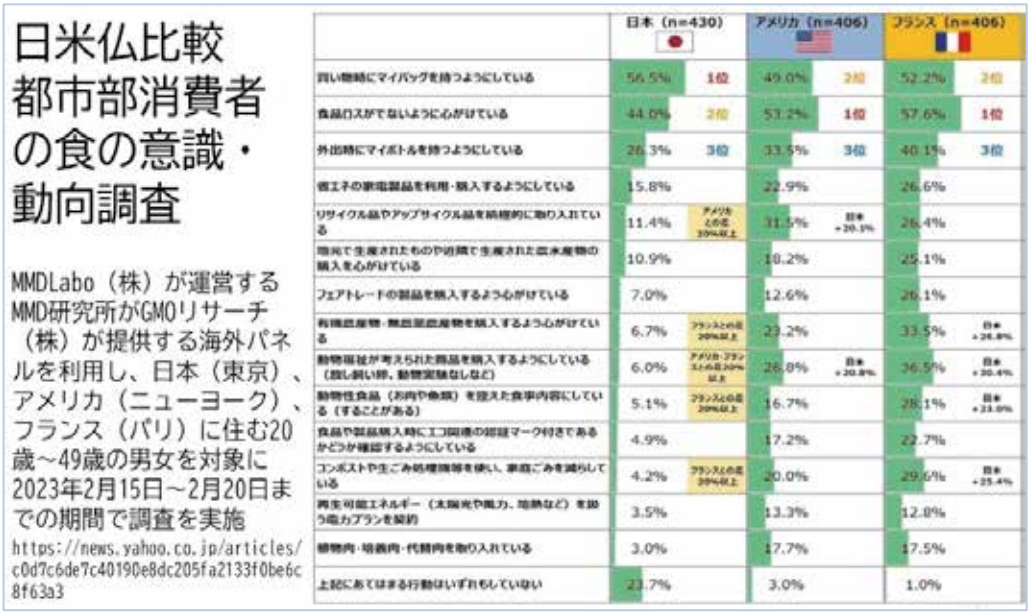
まず、私自身カーボンニュートラル、資源循環社会では危機感も持っています。というのも、例えば、これは（図４）わかりやすくて面白いので、ご紹介します。

東京、ニューヨーク、パリの消費者に、買い物するときに SDGs とか環境配慮しているかを色々な項目で聞いた結果です。一番上はレジ袋の持参で、これだけは日本はダントツというか、一位です。やはりレジ袋有料化もあり皆さんの意識も行動も大きく変わっている。ところが下に行きますと、食品ロスが出ないようにしていますか、では、崎田さんも頑張っておられますが、ちょっと悪くなって、その後、マイボトルを持っていますか、省エネ製品買っていますか、リサイクル品買っていますか、それから地産地消のもの、フェアトレード、有機野菜、動物福祉など聞いていますが、皆さん見ての通り日本は緑色がとても少なくなっています。

一番最後の「上記に当てはまる行動は何もしていない」が 24%という若干残念な結果になっています。こういう傾向は色々なアンケートでも見られます。色々考察ができて、必ずしもこれが悪いというわけではないのですけれども、やはりこの違いっていうのは大変気になるところです。

そんな危機感も覚えながらも、自らやはり絶対に資源循環型社会は構築できると信じている立場からは、自らも事例を作っていこうということで今日は二つの取組をご紹介させていただきます。

まず一つ目は、先ほどもご紹介しました京都の里山での地域おこしです。これ（図５）は 2019 年に京都大学、京都市、そして今は京都府も入りました。そして企業が 20 社ぐらい入り京都超 SDGs コンソーシアムを作っています。超をつけるという思い切った名称ですが、1300 年の歴史を持つ京都ということで、SDGs を超える発想、それから学びがあるのではないかということで色々な活動をしている中で、ローカル SDGs（図６）に取り組もうと



	日本（n=430）		アメリカ（n=406）		フランス（n=406）	
買い物時にマイバッグを持つようにしている	56.5%	1位	49.0%	2位	52.2%	2位
食品ロスがでないように心がけている	44.0%	2位	53.2%	1位	57.6%	1位
外出時にマイボトルを持つようにしている	26.3%	3位	33.5%	3位	40.1%	3位
省エネの家電製品を利用・購入するようにしている	15.8%		22.9%		26.6%	
リサイクル品やアップサイクル品を積極的に取り入れている	11.4%	アメリカとの差30%以上	31.5%	日本+20.1%	26.4%	
地元で生産されたものや近隣で生産された農水産物の購入を心がけている	10.9%		18.2%		25.1%	
フェアトレードの製品を購入するよう心がけている	7.0%		12.6%		26.1%	
有機農産物・無農薬農産物を購入するよう心がけている	6.7%	フランスとの差20%以上	23.2%		33.5%	日本+26.8%
動物福祉が考えられた商品を購入するようにしている（放し飼い卵、動物実験なしなど）	6.0%	アメリカ・フランスとの差20%以上	26.8%	日本+20.8%	36.5%	日本+30.4%
動物性食品（お肉や魚類）を控えた食事内容にしている（することがある）	5.1%	フランスとの差20%以上	16.7%		28.1%	日本+23.0%
食品や製品購入時にエコ関連の認証マーク付きであるかどうか確認するようにしている	4.9%		17.2%		22.7%	
コンポストや生ごみ処理機等を使い、家庭ごみを減らしている	4.2%	フランスとの差20%以上	20.0%		29.6%	日本+25.4%
再生可能エネルギー（太陽光や風力、地熱など）を扱う電力プランを契約	3.5%		13.3%		12.8%	
植物肉・培養肉・代替肉を取り入れている	3.0%		17.7%		17.5%	
上記にあてはまる行動はいずれもしていない	23.7%		3.0%		1.0%	

図４

図５

図６

図７

決めて、そのターゲットを京都の市街地と京都の里山、過疎化が進んでいますが、そこを繋いで、ヒト、モノ、カネをしっかりと循環できないかという取組を始めています（図７）。

また、ご関心を持っていただけたらぜひ見ていただきたいと思いますが、先ほどのとおり廃校を利用してそこをSDGs の拠点としてイノベーションを起こし、そして共創を起こしていこうということで取り組んでいます（図８）。

活動の一つとしては、京北も京都市の一部なので、今までは生ごみは２時間ぐらいかけて街中まで持っていって全量焼却処理をしていたのですが、これを地域で循環させて、しかもそれを農業に使えないかというような取組を始めています（図９）。これは地域がブランド価値を持ったり、もしくは食料の安全保障的な役割にも繋ぐことができないかというような取組をしたりしています。

そんな中で、もちろんグローバルに回すべきものもあるとは思うのですが、地域の中での循環は大変重要で（図 10）、これを今後、うまくハイブリッドしていく必要があるとも感じていますし、また地域だからこそ私たちが動くことで、実際に変化が目に見えるというダイナミクスも感じているところです。

それからもう一つの視点は若い世代です。若者の皆さんとの取組では、若い世代の足や気持ちを引っ張らないようにしなければいけないということを強く感じている日々です。その理由もご紹介したいと思います。こちら（図 11）は別の調査で行われたもので、面白いものだったのでご紹介します。

商品やサービスを選ぶときに SDGs を考慮していますかと尋ねたアンケート結果で、緑が考慮したい、薄い緑がやや考慮したいという結果になっています。下の方を見ていただきますと、もう明らかに違いがおわかりなると思います。10 代だけが飛び抜けて意識が高いのです。本当に SDGs ネイティブ世代ではないかと思います。一つの仮説として考えているのは、2020 年に学習指導要領が大幅に改定されて、その中で持続可能性があらゆるテキストに入るようになりました。子供たちにとっては当たり前で、こういうことを常々議論している環境にあるというのは非常に大きいと思っているところです。

私たちもいろんな小中高と一緒にカリキュラムを作ったりしていますが、一つの例として、もう８年ほど前から一緒にやらせていただいている京都市の小学校との事例です。５年生が我々としては対象ですが、SDGs を学んでいただいて１カ月ほどすると、子供たちは色を見ただけでナンバーの何かわかるぐらいに、いわゆる SDGs 眼鏡をかけた状態になります。その状態で街歩きをして、自分たちで SDGs マップを作ってみたという事例（図 12）とか、自分たちが残したいもの、逆に持続するには課題であるもの、そういうものを自分たちで発掘して、それを地域の人に提案していくというようなこともやっています。また、それをいかに大人に広げていくかというところで去年行ったのが、地域の事業者の方と一

図８

図９

図10

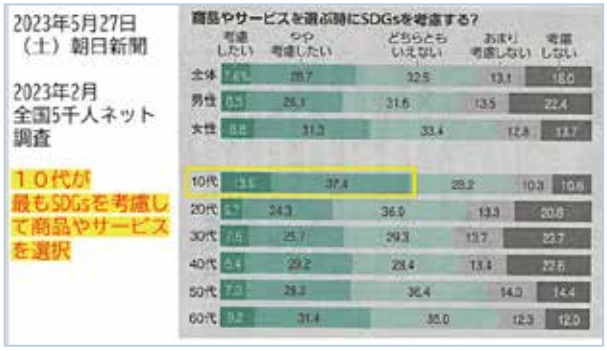


図11

図12

図13

図14

図15

図16

緒に地域の持続可能性に資することを何か一緒にできないか、新しい商品を考えてみたりサービスを考えてみたりというような提案に繋がり、一部は事業者の人もその気になってやる気を出して一緒にやっていこうというような盛り上がりを見せたりもしています（図 13）。

それをもっと全国に広げようということで中高生向けのプロジェクト（図 14）をしたり、さらにはグローバルにも広げてみようということで、今年の３月からは地球環境ユースサミット（図 15）という形で海外からの参加者も受け入れて、こういうネットワークを作っているところです。

図17

あとは崎田さんとも 2025 大阪･関西万博に向けて一緒に資源循環を盛り上げようというような話し合いもしていますが、そんな中でも、できるだけ若い人たちの力を借りて展開していこうというようなネットワークの活動もしています（図 16・17）。

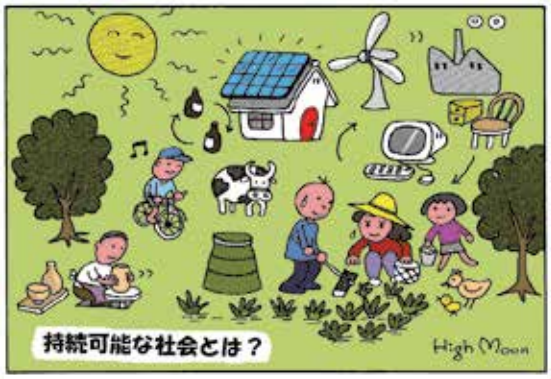


図18

最後に、私の恩師でもあります高月紘先生、ハイムーン先生の漫画です（図 18）。持続可能な社会とは？ということで、ハイテクイノベーションもしながら、色々なものと共生・共創していく中に、豊かで楽しい持続可能な社会が見えてくると思っていて、今日も楽しくどうやってそこに向かっていくかというディスカッションをさせていただければと思っています。ご清聴ありがとうございました。

○崎田　浅利さん、ありがとうございます。浅利さんは京都中心に大学の研究者として、地に足のついた形で広げてくださっておられます。最後の絵を見ても、持続可能な社会に向けて技術イノベーションと暮らしイノベーション、全体を総合化して取り組むのが大事だという思いがしました。それでは次のお話ですが、秋田県生活環境部環境整備課長の大門洋さんです。よろしくお願いいたします。

○大門　皆さんこんにちは。秋田県生活環境部環境整備課の大門と申します。私の方からは「循環型社会の実現に向けた秋田県の挑戦」と、ちょっと大それたタイトルをつけさせていただいておりますけれども、今年度の県の取組をご紹介い

たします。本日は県外の方々も多くおられると思いますので、お時間をお借りして、最初に秋田県の紹介をさせていただければと思います。

地図（図１）上で見ますと、当県は東京のほぼ真北450km のところに位置していますが、男鹿半島のある西側は日本海に面していて、北緯でいきますと北京やニューヨークなどと同じ北緯 40 度、総面積は 11,638 ㎢で、全国の６番目の面積を有しています。ただ森林が約７割ということで森林の多い県となっています。

東側、岩手県側県境の方は奥羽山脈が走っていて、中程は八幡平、駒ヶ岳、南の方に栗駒山などの火山や岩手県側の真ん中辺りに水深が日本一深い田沢湖があり、北の方には十和田湖があります。

ここら辺は有名な温泉地にもなっていて、特に玉川温泉は毎分 9,000ℓも湧出量がある日本一の温泉で、酸性度も高く、数多くの湯治客が来られています。日本海側の北側の方には世界遺産 30 周年記念を迎えた白神山地があり、その反対南側には東北第二の高峰である鳥海山があります。当県は豊かな自然が多く、その自然を財産にしていかなければならないと思っています。

県では豊かな水と緑あふれる秋田を次世代に継承していくために環境保全の総合計画である環境基本計画に基づいて、県民、事業者、そして民間団体、行政、それぞれ各主体のパートナーシップによって、環境政策の推進を通じながら、持続可能な社会を目指していきたいと考えています（図２）。

こちら（図３）が、県の循環型社会基本計画の基本理念を示したものです。県の循環型社会基本計画で目指す四つの姿として、「循環を基調としたライフスタイルが定着した社会」、「環境を理念に据えた事業活動が展開される社会」、「適正な資源循環のための基盤が構築された社会」、それから「役割分担とパートナーシップにより創られる持続可能な社会」、この四つを目指して今取り組んでいます。

「秋田県の挑戦①」（図４）の左側の図は、１人１日当たりの一般廃棄物の排出量です。お恥ずかしながら秋田県は令和３年度で１人１日当たり 989g で、全国平均の890gに比べて99gも多い結果となっています。全国平均は右肩下がりで非常に順調にきていますが、当県は人口減少の中でもなかなかこの数値が下がらない状況にあります。県民性の所以ではないかと言われる方もいますが、今の社会はそれだけでは済まされない気がしています。そういう中で、プラスチックに着目したのが右側の図で、中ほどの図は実際に市町村でプラスチック資源をリサイクルしている量を表したものです。右端は

図１

図２

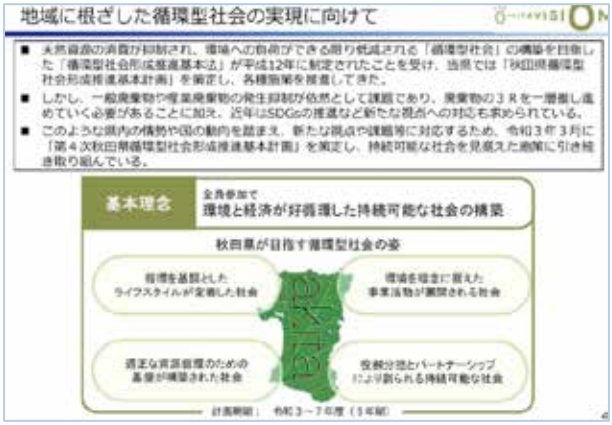


図３

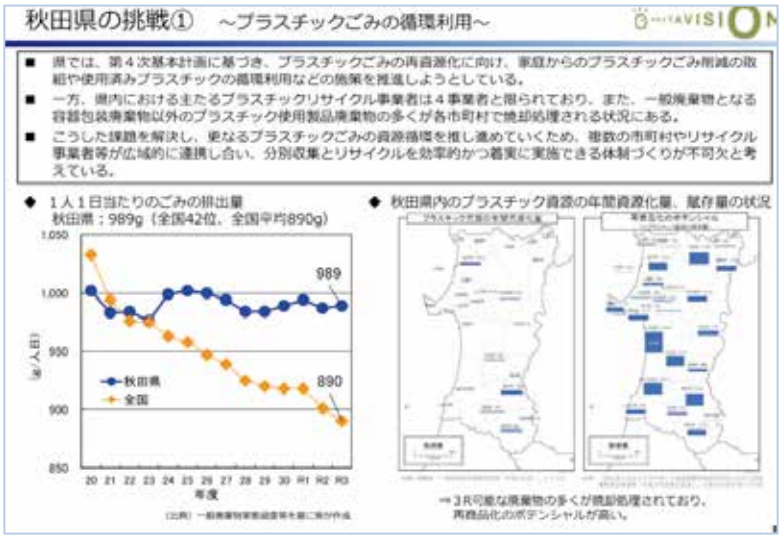


図４

県内の家庭から排出されるであろうプラスチックごみの賦存量です。

この二つを比較するとおわかりのように資源化が少ないということで、昔で言えばサーマルリサイクル、今だとサーマルリカバリーに回っているという現状です。そういう実態を踏まえて、秋田県では一般廃棄物処理の主体は市町村ですが、県でも市町村の取組を後押しするような形のものができないかということで、プラスチックごみに着目して、その一括回収と資源化に向けた実証試験を今年度行っています。こちら（図５）の環境省の「プラスチック資源循環に関する先進的モデル形成支援事業」の採択を本年度受けまして執り行っているものです。各家庭から排出される容器包装類やその他製品プラスチックを一括回収します。一括回収にご協力いただいてる市町は大仙市と美郷町と、それらで構成される一部事務組合で、一括回収したプラスチックごみは、最終的には県南にある湯沢クリーンセンターにお願いして、マテリアルリサイクル、ペレット化などを図ることとしています。

図５

そちらの実証試験を行いながら今回のプラスチック新法の第 33 条認定を取得しながら進めていきたいと考えております。本モデルのコンセプトは、複数の市町によるプラスチックごみの一括回収・再商品化をするということと、それ以外に既存のスキームや施設を最大限に活用しながら住民の方々の理解も得ながらやっていくということ、今回のプラスチック新法を活用していくということが挙げられています。今年 10 月 11 月にかけて実証試験中ですが、美郷町の１回目の回収の状況を見て、その大量さに私もびっくりしました。９月頃から町から町民の皆様に、専用の袋に入れて回収しますからこちらに入れてくださいとアナウンスしましたところ、10 月前からもう既に結構いっぱい集めていただいていて、多分これから２回目３回目となると、少なくなるのではと思いつつも、こんなにプラスチックごみがあるんだなと思った次第です。ただ今、これについて組成調査などをしながら資源化に適するものがどのくらい入っているのかとか、どうしても資源化できない例えばリチウム電池などが入ってないかという調査をかけています。

もう一つの取組は食品廃棄物です。食品廃棄物の広域的なリサイクルを目指そうとしており、先ほど１人１日当たりのごみ排出量を述べましたが、989g と非常に多い。これ（図６）は令和２年度の数字ですが、１人１日当たりの当県の食品ロス量も 130g と全国平均より約 17g 多いという結果になっています。県としてもこの状況を少しでも改善させたく、今回は、男鹿市にある食品小売店の伊徳さんと、潟上市にある食品小売店イオン東北さんのザ・ビッグで、まず小売店でできることをやって、排出抑制を図っていただくことを始めようとしています。

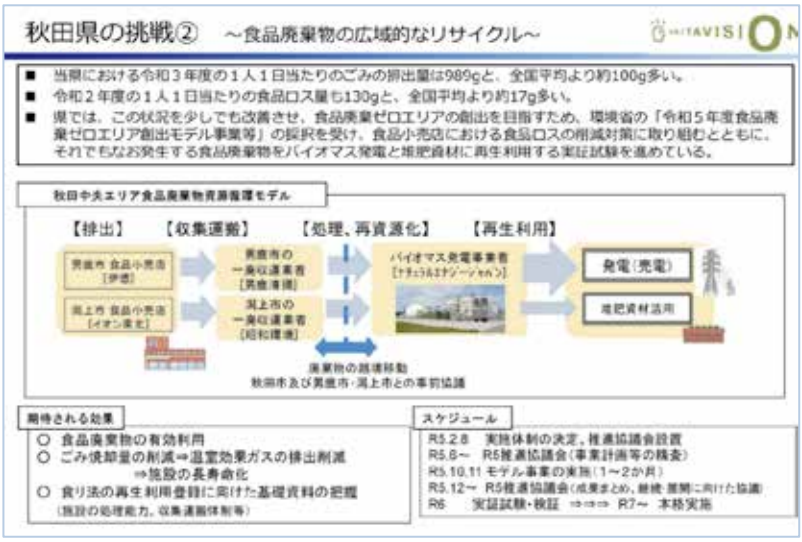


図６

例えば、賞味期限が近づいている商品の「てまえどり」とか、日販品の惣菜物などその日のうちに食さなければならないようなものの値引き品、こちらをまずご購入していただいたお客様には秋エコどんどんプロジェクトという携帯アプリですが、そちらでポイントがつくような仕掛けも踏まえながら、意識づけをして

いきたいと考えており、まずスーパーさんにできることをやってもらっています。それでもどうしても出てしまうものは、一般廃棄物のルートにより収集運搬をかけます。通常だと、ここから各自治体のごみ処理場に行くのですが、今回のモデル事業ではこちらで集めたものを、市町村境を越境して秋田市にあるバイオマス発電事業者の株式会社ナチュラルエナジージャパンさんへ持って行きまして、そちらでメタン発酵化を行い、そのメタンを使った発電事業と、メタン発酵の残渣の堆肥資材活用を行う予定としています。期待される効果としては食品廃棄物の有効利用や温室効果ガスの削減にも寄与すると考えており、こちらも今年度行う予定でこの二つの取組をしっかり効果検証していきたいと思っています。

県としては今年度この二つの実証試験を通じながら、何とか３Ｒ・資源循環に寄与した取組を県内の市町村さんにご紹介をさせていただいて、より多くの仲間を増やしていきたいと考えています。以上です。ご清聴ありがとうございました。

○崎田　大門さん、ありがとうございます。自然豊かな秋田を次世代にという願いを県として持っておられて、でもごみの量が実は全国平均より高いという中で、一般廃棄物の分野でも積極的に動いておられるということでした。後ほどこれをどういうふうに発展させたいかというところをぜひお話しいただきたいと思っています。それではお待たせしました、環境省環境再生・資源循環局の循環型社会推進室長の近藤亮太さん、先ほど来お話が出ています第五次循環基本計画の見直しに向けた指針などに関して、しっかりとお話をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○近藤　環境省の近藤です。資料は文字が多くなっていますので、なるべく言葉でわかりやすくお伝えしたいと思います。ご紹介のありました第五次循環基本計画は来年の６月に閣議決定すべく今作業を進めていて（図１）、今年の 10 月、赤字で書いています具体的指針ということで、中間取りまとめのようなものを作っています。その概要をこれから簡単にご説明しようと思っています。

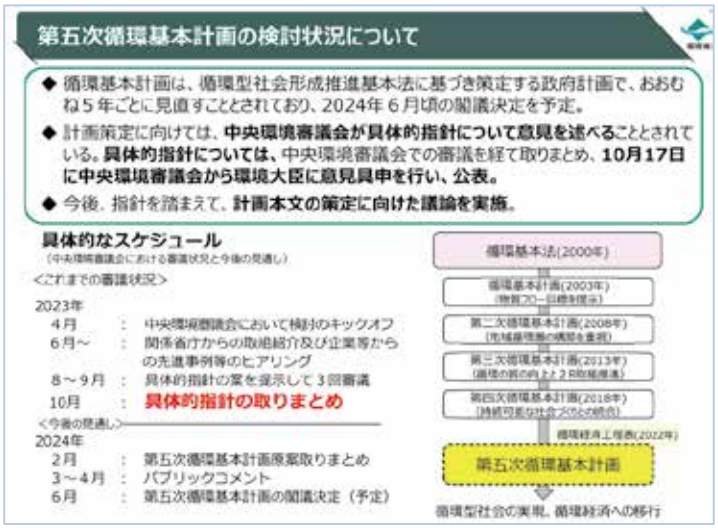


図１

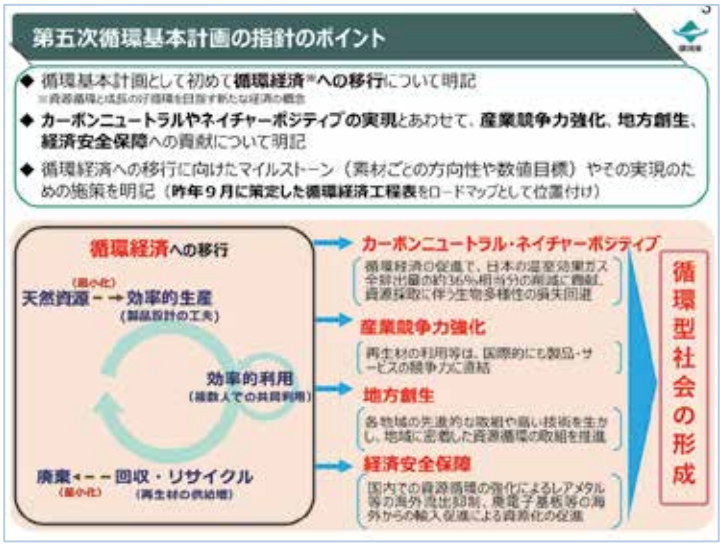


図２

その概念図は左の下にあります。これまでは３Ｒを進めてきましたが、個別のリサイクル法を達成するという方向でリサイクル進めてきたというところがあります。これからは循環経済への移行ということで、循環型社会を作るツールとしてビジネスベースでバリューチェーンを通じて付加価値を作っていく、そしてどんどん再生材を生み出して製造側で使っていただく。目標達成するというよりは、もうちょっとビジネスベースで後押しをしていくような施策として変えていきたいと思っています。

これをさまざま大きな文脈の中でしっかり続けていこうと考えていて、それが右側の部分になります。カーボンニュートラルという意味で言えば、廃棄物の処理から出てくる直接的な排出量は、日本の排出量の３%に過ぎませんが、再生材を使うとバージンの材料を代替することとか、あるいは燃料を代替することによって全排出量の 36%分の排出の削減に貢献できる余地があるという試算があります。

また産業競争力の強化という意味で言えば、再生材はプラスチックに限らず金属な

ど海外からなかなか日本に持って来づらい部分もありますが、それを日本に持ってきて使っていく、あるいは経済安全保障にも通じる部分ですが、日本にある資源をうまく使って、日本の経済の力にしていければと思っています。

また地方創成ということで、地域で人がいて産業があれば必ず廃棄物が出てくるので、それを地域でしっかり循環させていきたいと思っています。

ポイントをいくつか申し上げますと、まず一番上（図３）ですが、循環経済の移行の概念が書かれてあります。ポイントは２番と３番でして、２番では動静脈連携がキーワードになります。これは製造側と廃棄物リサイクル業の方が両方で話し合いをして、コミュニケーションを取りながら使っていくものを増やしていく。これは廃棄物リサイクル業の方でいかに再生できる材を持ってきても、これを製造側の方でうまく使っていかなければ、使う量は増えていきません。これをビジネスベースに乗せて両方でどのように使えるか、こういうものはいけますよというコミュニケーションをよくとりながらパイプを太くしていけるように進めていきたいと思っています。

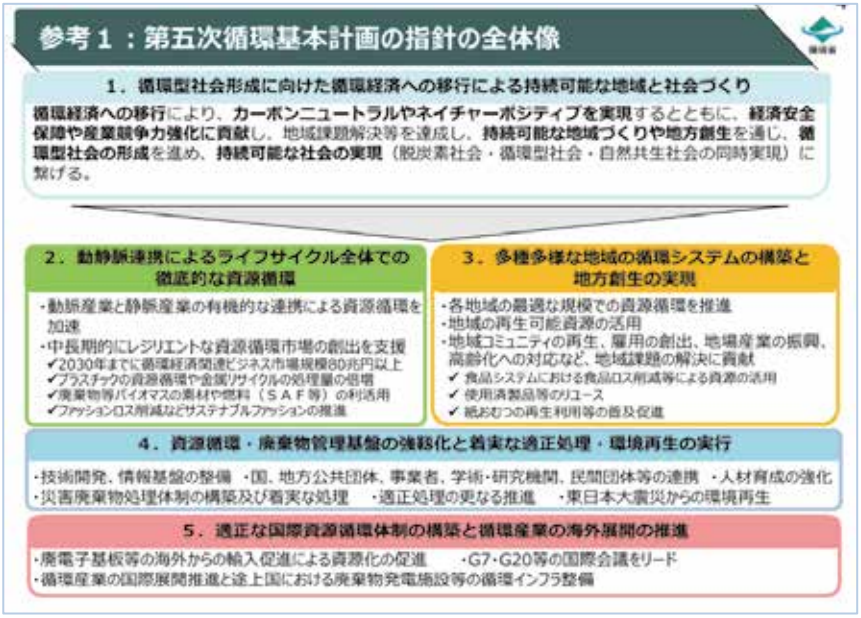


図３

今、足元の循環経済市場は 50 兆円と言われていますが、2030 年にこれを 80 兆円に持っていくことで、プラスチック、金属のリサイクルを増やして行く。バイオマスの活用もそうです。それから世間ではファッション、衣服の多くが廃棄されていることに注目が集まっていて、リユース産業の人を中心に衣服のリユース、ファッションショーを行うということも最近多く、そういうものには投資をしていきたいと思っています。

右側の地方の部分ですが、このところはキーワードが地域と暮らしで、先日、就任された伊藤大臣も就任会見のときから同心円ということをよく話されています。地域と暮らしからスタートして、これを日本経済全体に広げていって社会変革していく、スタートは地域と暮らしだよということを常々仰っておられますが、まさにその通りかと思います。

一方で、審議会の議論でも先ほども出ましたが、若者のライフスタイルは変わっているので、この勢いをどういうふうに社会全体広げていくのかということも大事です。また、先ほどお話も出ましたが、市町村では廃棄物の処理費用がかなりかかっているところがあるので、これを削減をして資源に変えていくと処理費用も減り、資源としての財の価値を増やしていけます。もう少し補足すると、食品バイオマス活用、紙オムツの再生利用、またリユースを進める、紙ごみをリサイクルするということをしていくと、一般廃棄物として焼却に回わる量が減って、どんどん資源に変わっていくので、地域でいかにこういうものをまわしていくのかが重要となります。そして、こ

図４

れを進めることによってリデュースなどの意識が高まるので、暮らしも変わってきます。そういうライフスタイルを変えていくところにどうつなげていくのか、という議論をここでしていきたいと思っております。

最後に循環経済工程表について（図４）ですが、循環基本計画を点検する中で、昨年の９月にこの走りとなるものをまとめています。80 兆円の話とか、プラスチック、金属資源、食品廃棄物についてもそれぞれ具体的な目標をここで掲げていて、議論は実はこのときからスタートしていて、これを具体的にどのように進めていくのか、素材ごと、製品ごとにしっかり新しい計画に変えていきたいと思っています。簡単はありますが、以上になります。ありがとうございました。

○崎田　ありがとうございます。大変重要なお話をシンプルにすっきりとお話いただきました。今のようなお話を伺ったところを大事にしながら、皆さんとお話をしていきたいと思います。具体的には、動静脈連携によるライフサイクル全体での徹底的な資源循環というところで、プラスチックと食品ロスは今まで話に出ていましたが、ファッションに関しても最近大変関心が高まっているということ、もう一つは、地域作りという視点が大変重要だということなど、暮らしやライフスタイルを変換していくことを全体で取り組むことで、経済全体の動きを変えていくという大きな動きができるのかなと思って伺っていました。こういうお話を踏まえて皆さんと意見交換をしていきたいと思っています。

まずぜひ伺いたいのは、今日は 2050 年カーボンニュートラルを目指してという将来展望をしっかりと持っていくという話なので、皆さんにお話しいただいた現在の取組状況をどういうふうに発展させたいと願っておられるかという将来像や夢を語っていただきたいと思っています。最初にお話いただいた秋田エコプラッシュ株式会社の小泉さん、プラスチックのリサイクルに関して効率の良い資源循環を提言しておられますが、どのように発展させていきたいと思っておられるか、そこからお願いします。

○小泉　これからどんどんプラスチックに係わる環境が厳しくなっていく状況下、近い将来、化石燃料から作られるプラスチックの原料・バージンプラスチックについては生産制限が設けられると考えます。使いたくても使えない状況が出てくる。そうなりますと、リサイクルプラスチックに置き換えられるものを置き換えていかなければいけないという状況になってくるはずで、リサイクルプラスチックは需要に対し供給が間に合わない状況になると思われます。

実際に車に関して言うと、2030 年から全プラスチックのうちリサイクル材が 25%以上使用されていないと欧州では販売できなくなります。また、昨年イギリスから始まったプラスチック包装税では、プラスチック包装材にリサイクルプラスチックが 30%以上含まれていないと、プラスチック包装材全体に対し 200 ポンド/ｔ課税されるというもので、施工後、イギリス国内でのリサイクルプラスチックの需要は急拡大したと聞いております。

先ほど言ったようにプラスチックは生活を豊かにするために重要なものです。可能な限り、不足することがないようにしっかりリサイクルをしていかなければいけないと考えています。先ほどの細田先生のお話にもありましたが、リサイクル可能なプラスチックであっても、まだまだ捨てられているもの、単純焼却されているものがあると聞いています。こういうものを、少しでも掬い上げてリサイクルの輪に乗せていかなければいけないと考えている次第です。

○崎田　ありがとうございます。プラスチックリサイクルの会社として、バージンプラスチックからリサイクル資源に転換していく、そういうことを前提にした製品設計をしていくのは、皆さんの会社１社だけではなくて、他の企業やリサイクラー、回収の方など、様々なところと連携する必要がありますが、それはうまく広がっていきそうな状況でしょうか。

○小泉　そうですね、完全に全部を掬い上げられるというのが見えている訳ではないのですが、少しずつ広がりを見せるのは事実です。ただ、それが 2050 年のカーボンニュートラルというゴールに向かったペース配分になっているのかどうかというと、まだ少しスピードが足りないのではないかと思っています。

○崎田　ありがとうございます。スピードが足りないということで、どうやってスピードを上げるかという辺りの話は後ほどぜひ伺いたいと思います。

次に環境あきた県民フォーラム理事長の佐藤さんは、先ほどプラスチックや食品ロスについて県民の皆さんの共創意識を喚起するのが大事というお話をされていましたが、今後どのような活動を広めて、意識喚起を徹底しようとされているのか、もう少しお話しいただけますか。

○佐藤　まずプラスチックと食品ロスに分けてお話ししたいのですが、プラスチックについてはまずプラス

チックごみを減らすこととリサイクルを進めるということに尽きると考えています。それでプラスチックごみを減らすにはプラスチック製品に私どもがどのように向き合っていくのかという価値観にも繋がっていく大変重いテーマも全体にありますが、いずれ代替品も含めて吟味しながら使っていくことが大事だろうと思っています。

またリサイクルについては、先ほど細田先生のお話にありましたが、マテリアルリサイクルを進めて CO_2の削減の観点からも焼却をできる限り少なくすることが基本と認識しています。このプラスチックごみのリサイクルについてはプラ新法に基づいて自治体での分別収集の動きが県内でもあり、また住民の３Ｒに対する考え方の意識もある程度定着してきている部分もあるので、自治体の受け皿がある程度整えば、さらに前の方に進むのではないかと思っています。

食品ロスについては、私ども家庭での食ロス対策として、地産の食材を使ったエコクッキングの体験講座を行っていますが、非常に反響も大きくて、口コミで広がりつつあるという状況もあるので、こうした動きを大事にしていきたいと思っているところです。また関係機関が繰り返し、こういった情報を発信していくとも非常に重要だろうと思っています。

それから事業系の食品廃棄物については先ほど大門課長の説明もありましたが、県内のガス化の発電施設がまだ余力が十分あるようなので広域的な課題も乗り越えながら、十分に活用されていくよう期待をしているところです。

○崎田　はい、ありがとうございます。プラスチックなどは市民の方がしっかり回収に参加するのも大変重要ですし、食品ロスに関しても今お話が出ましたが一層の定着を期待したいですね。またどうでしょうか、佐藤さん。先ほどの環境省のお話でファッションの話が最近非常に関心が高くなっているということでした。これまでも洋服、古着や古布は意外に回収システムがなくて、皆さん、集団回収などで苦労されていたと思いますが、今どんな状況か、一言いただけますか。

○佐藤　秋田市内で環境団体が古着を回収して、リサイクルを年１回程度行っています。非常にニーズが高く、私も利用しています。私はその１点しか存じ上げないのですが、そういった取組も今進められているという状況です。

○崎田　ありがとうございます。ファッションメーカーさんや、それを販売するお店などの皆さんも何かやらなければいけないという意識が最近ずいぶん出てきたと思います。そういった事業者の取組も具体的になると、市民の皆さんがきちんと集めたり古着を使ったり、全体が連携してくるとよいと思いますね。

それでは、大門さんに伺いたいのですが、秋田県でプラスチックの一括回収とか食品廃棄物の資源化とか、県のお立場ですが、一般廃棄物の回収に積極的に取り組んでおられるような印象があったのですが、このような県の取組をどのように広げていこうとされているのか。その辺をもう少し教えていただけますか。

○大門　はい。仰られる通り、今回一般廃棄物に目を向けて県の方で取り組んでいますが、確かに今の法律の立て付けでいけば一般廃棄物は市町村に処理責任があるなかで、なぜ県がというところもあろうかと思います。県でもこれまで一般廃棄物を全く無視してきたかというとそうではなくて、私が県庁の廃棄物担当に就いた頃は、サーマルが主体だったと思いますが、水切りをしっかりしましょうとか、サーマルによらなければたい肥化しましょうとか、そういう動きを市町村さんと一緒になってやってきたと記憶しています。ただなかなかそれらが進んでいかず、依然としてサーマルの焼却による処理が進んできていたわけですが、各市町村が単独で処理できるような状況にはだんだんなくなってきて、広域的に処理していかなければならないのではないかと、その橋渡し役として県が担うべきではないかと思い、今回取り組んでいます。そのため、まず今回の実証試験をしっかりと効果検証しながら、そのメリット、デメリットなどを分析して、各市町村に結果をフィードバックし、各市町村さんの方で反映していただくような取組を今後とも進めていきたいと考えています。

○崎田　ありがとうございます。素晴らしい視点だなと思い質問させていただきました。このように県が積極的に国のモデル事業などを受けてデータを蓄積して、そして市町村の皆さんを巻き込んでいくというのは素晴らしいやり方で、積極的に広げていただければと思います。

浅利さんは、先ほどの環境省のお話でもそうですが、次世代の皆さんと一緒に行うことが大事と話されました。特に浅利さんは大学の指導者として、次世代を巻き込むということに関心をお持ちでしたが、その意

義や今後の展望について、お話しいただけますか。

○浅利　はい。その前に先ほどのお話で少し気になったことがありましたのでお話しさせていただこうと思います。小泉さんのお話に対して崎田さんから、いかにバリューチェーン、みんなで繋がって情報共有しながら取り組むかというお話あったかと思います。これも一つのイノベーションかと思うのですが、今 DPP、デジタル製品パスポートを整えてバリューチェーン全体で素材の情報であったり、もっと他にもいろんな環境情報をみんなで共有していこうという取組が始まっています。それは単に情報を共有するだけでなくて、どんなものが必要かとか、どういうものが今出ているのかというところで、積極的に静脈と動脈を繋ぐところまで持っていこうというものです。そういうものが地方といいますか、各地域にも落ちていくような日本のモデルができればいいと思っているということを一言申し添えたいと思います。

世代間というか若い世代との交流では、先ほど 10 代から 20 代、60 代と見たときに、もう 10 代が SDGs ネイティブだと申し上げました。その前に日本の消費者の意識が世界的に見て、ちょっと弱いなという話もしたかと思いますが、日本がなぜ環境配慮の消費ができないかというのは我々の研究課題なのですが、一つの仮説として我々の研究グループのメンバーが言っているのが、日本人は普段家族とか友人と社会課題について話す機会が極めて少ない。一方で海外ではその家族とか友達とかともそういう社会課題、いろいろあると思うのですが、そういうことをよく会話しているという結果もあります。日本人の場合はこれまでは、そういう話をしていると、熱いとかうざいとかどうしても冷たい目で見られることもあって話しづらい。それは結局、自分の価値観として表現するのに繋がってこなかったというところがあるのかなと考えてます。そういう意味で SDGs 世代が出てきて、自分たちは SDGs に配慮して買い物しますと言ってくれることはすごいなと思っています。

先ほど商店街の方と子供たちの取組を紹介したのですが、その中でフューチャーデザイン、将来をデザインするというプログラムをします。2050 年とかもっと先を想像したときに、社会がどうなっているか、どうあるべきかを想像して、それから考えて今どうあるべきかを考えましょうということですが、実はそれをやってみると、案外若い子の方ができないのです。むしろ年配のかたの方ができます。お話を聞くと、年配の方は何十年も生きてくる中で、世の中が大きく変化してきて、その変化の幅の広さがわかるので、結構思い切った未来のデザインができたりするのです。なので、そこの世代間の交流をうまく作って、本当に未来の議論をしてデザインしていくという可能性が大いにあると感じています。特に世代も含めて多様な人と交流をして共創していくことに対しては、大変期待と可能性を感じているところです。

○崎田　ありがとうございます。年代によってできることもあるので、全体がうまく力を合わせていくことは大変重要ですね。

○浅利　そうですね。SDGs ネイティブであると同時に DX ネイティブ、IT ネイティブでもあるので、もう全然違う特性・特技を持ってる人たちが今一緒に空気を吸って活動しているということ自体がとても面白いと思っています。

○崎田　ありがとうございます。今、次世代との繋がりということで質問しましたが、全体に広げて再び浅利さんに伺いたいのですが、本日のテーマの将来に向けた共創とイノベーションについて、皆さん狙いはしっかりあるのですが、たくさん課題も抱えているという状況だと思います。そこを繋いでいくときにどこが課題になるか、どのようにそこを繋げていったらいいか、もう少しご意見をいただけますか。

○浅利　はい。今お話しした世代の違いにも共通すると思いますが、今はとても便利で、それを当たり前のように享受している。この当たり前を変えなければいけないときが来ていて、心の改革をまずはしなければいけないと感じています。日本人の場合はかなり多様性に乏しい環境で暮らしていて、コンビニしかり、百均しかり、どこに行っても便利なものがあります。プラスチックで言うと、私たちも消費者の方にアンケートをしてみましたが、50 製品のプラスチック製品を選んで、どうしてもこれはプラスチック製品として必要ですかと聞くと、1～2 割の方しか絶対にプラスチックでなければ駄目だとは言いません。もちろんプラスチックであった方がいいものもあると思いますが、今は当たり前のように便利にあるのでそれを使っているが、様々な変革の余地があり、今の当たり前をまず１回見つめ直すところから始まっていくのかなと思います。

○崎田　ありがとうございます。再生資源をしっかり使って、製品作りから変えていこうというプラスチックの話がありましたが、それをどのように私たち消費者が選んで使っていくか、あるいはその３Ｒを徹底したライフスタイルにするとか、私たちが毎日やっていることが当たり前ということではなく、ちゃんと考えていかなければいけないということですね。

○浅利　2050 年のカーボンニュートラルとなった世界で、私たちがプラスチックとどう向き合っているかはなかなかそのイメージもできていないと思いますので、そこは私たち研究者もお見せしていかなければいけないと思いますし、その道筋を行政の方とも一緒に考えなければいけないと思います。色々な形でわかりやすく表現する、さまざまなコラボレーションができるかと思います。

○崎田　ありがとうございます。佐藤さん、この地域の中でさまざまな環境活動・環境行動の応援や啓発を行っておられますが、今の市民のライフスタイルの変革という点で皆さんが取り組む上での課題など、一言いただけますか。

○佐藤　住民との共創の視点から一つ申し上げたいのですが、住民の方々の関心をどうやって高めて理解を深めて共同していくかはもちろん基本かと思います。そして地域に根ざした取組にするためには私どもの立場からすれば、やはり市町村の皆様方と連携しながら取り組んでいくことが必要不可欠と思っています。また地域には環境の活動に非常に熱心な方々も多数おられますので、そうした方々と協力をしながら、取り組む人の輪を広げて、地道に、そして継続するということをいつも言っていますが、これを大事にしながら、何とか取組を盛り上げていきたいと考えているところです。

○崎田　はい、ありがとうございます。実際にさまざまな施策を展開する市町村との連携とか、地域のキーパーソンの熱心な方たちと連携しながら発信していくことは、大変重要なことだと思います。

大門さん、今のお話につながりますが、市町村の関わりが強い一般廃棄物を、県がモデル事業としておやりになるときに、定着に向けた課題解決を目指しておられると思いますが、普及啓発の部分でも市町村との連携が非常に重要とのお話がありました、仕組み作りの上でも、どのように市町村とこれから広げていくか、お考えを教えてください。

○大門　はい、実証試験を始めたばかりですが、まずしっかりとその効果を検証して、メリット、デメリットをはっきりさせて、良い取組であるのか、もっと改善点が必要であるのかも踏まえて、市町村の担当者の方々とまず話し合いをしながら、そういう良い取組をしませんかと各市町村さんに呼びかけていきたいと思っているところです。そのためにはやはり今回の実証試験をしっかりと見極めていかないといけないと思っていますし、今後それに向けて進んでいこうとしているところです。

○崎田　ありがとうございます。重ねて質問させていただくと、一つ一つの市町村にとっては新たにいろいろな仕組みを作っていくのはとても大変なことだと思いますが、そういう意味でいくつか複数の市町村で連携して仕組み作るとか、そのような可能性はあるのでしょうか。

○大門　そうですね、一般廃棄物の現在の法体系でいくと、廃棄物処理法があるのですが、廃棄物処理法の行政区域を越境して処理をするというところがこれまでハードルが高かったかという思いはあります。ですので、今回のプラ新法の仕組みなども活用しながら、複数市町村で排出されたものを資源化できるインフラのある市町村へ持っていって広域的に資源として循環させる仕組み作りができればと思っています。

○崎田　広域的に力を合わせてやっていくというのは、一つの共創の視点では重要な分野だと思いますので、後ほど近藤さんにコメントいただこうと思います。

小泉さん、モノづくりの面で、先ほど浅利さんから、再生資源を使っていくときにしっかりと情報を伝えていくことが重要との話がありました。今いろいろ広げていかれるときに、さまざまな課題を感じておられると思いますが、その辺について一言お願いいたします。

○小泉　はい。まずその素材が何かということがリサイクルをするときにきっちり分かっていれば、より良いリサイクルができるというのは事実です。企業から入ってくるものに関しては当社が使えるもののみを持ってきますので、ほぼ 100%リサイクル出来ているのですが、家庭から入ってくるプラスチックごみは、どういう素材なのかわかりません。汚れているものもいっぱいあり、リサイクル率は低いと言わざるを得ません。当社に見学に来られる市民の方々は「リサイクル工場に持ってきたら元通りのプラスチックに戻ると思っていた」とよく言われますが、実際は、私どものところに入ってきた家庭から出るプラスチックごみのうち材料化できるのは約 50%となっています。約半分はプラスチックに戻せない。戻せなかったものはサーマルリ

カバリーに回されているのが現実です。

これからの課題は、もちろん当社のようなリサイクラーが、リサイクル技術をどんどん上げてリサイクル率を上げていかなければいけないといったことと、技術が十分なものになるまでの間、市民の皆さんもしくは企業の皆さんには、素材事に可能な限り細かく分別していただくことが重要だということです。

一つの例ですが、皆さんは PET ボトルのキャップはリサイクルしやすいと思われているかと思います。ある一面ではこれは正しくて、ある一面では間違っています。PET ボトルのキャップだけを集めていただければほぼ 100%リサイクルできます。しかし、キャップをプラスチックごみの中に入れてしまうと、これはほぼプラスチックに戻すことができていません。なぜかと言いますと、小さすぎて選別機で取り出すことができないからです。結果、先ほど言ったサーマルリカバリーに回ってしまいます。

いろいろ課題はあるかと思いますが、技術的な部分が上がるまでは、皆さんにはお手数をかけてしまいますが、徹底して分けていただくことが重要になっています。

○崎田　ありがとうございます。リサイクラーさんとして技術を高める努力はするが、市民の皆さんの分別回収の徹底など、お互い一緒になって取り組んで製品の質を高めていくことが大事というご提示をいただきました。

環境省の近藤さん、ずっと聞いていただきましたが、製品のモノづくりから消費者、そしてそれをどのように集めたらいいのかという県のお話など、モノのライフサイクル全体を繋ぐためにも、結構皆さん悩みが深いようですが、どのように今日のお話を思われたか、一言お願いいたします。

○近藤　ありがとうございます。循環経済の関係では、経団連さんなどからも、この１年でずいぶん企業さんの関心が高まってきているという話があります。今いろいろとお話が出ていたように、秋田県さんが市町村さんの取組をリードしていくという新しい動きをされたりとか、あるいはリサイクルされるにはどのような設計であればよいかを製造業の人たちがあまりよく知らないという話も先ほどお伺いをしました。このような新しい動きがどんどん出てきているというところを、共有していくことが一つきっかけになるのではないかと思っています。審議会で計画の議論をしている中でも、経団連さんから何人か委員の方が入っておられて、経済合理性が今の段階でビジネスベースに乗らないと新しい資源循環の取組ができないと言われる方もいます。一方で将来のことを考えたら、今足元で経済合理性がなくてもコストをかけても政府の支援を得ながら、新しい取組をしなければいけないのではないかと言われる企業さんもいます。

また、外食産業の方といろいろ話をしていたところ、プラスチックのカトラリーを木製とか紙製のものに最近変えたということでした。結構お金がかかるそうですが、なぜしているかとお聞きしたら、お客さんは結構お子さん連れが多く、将来のお客さんに選ばれないような産業にはなるわけにはいかないから、これはコストではなく投資ですという話もありました。そういう新しい動きを、皆さんの方でこういった場や審議会などで議論し共有していくことで、どんどん新しい知が広がっていくのではないかと思っています。

先ほどご紹介しそびれましたが、８月に岸田総理が富山に視察に行かれて、製品リサイクルの工場を見学されたのですが、地域にさまざまな資源が眠っていて、こうした資源循環は地域の経済を活性化する起爆剤になるというお話もされていました。そういう面もあり、さまざまな新しい動きを広く共有し議論していくことによって、新しい知恵が生まれてくるというように繋げていければと思っています。

○崎田　はい、ありがとうございます。企業の皆さんの関心も高まっていて企業同士の情報共有もこれから非常に重要になってくる。また、地域に眠っている資源もたくさんあり、そこの情報共有も必要、そういう情報がうまく繋がるように、環境省の方でプラットフォーム作りなど何かあれば一言お願いします。

○近藤　ありがとうございます。先ほどの細田先生の紹介にもありましたが、2021 年に J4CE（循環経済パートナーシップ）が経団連、経産省、環境省の三者で創設され、パートナーシップの中で循環経済をどのように進めていくかという話が始まっていますが、加えて経産省さんの方で産官学の連携パートナーシップということで新しい枠組みを立ち上げようという話があります。やはり動脈の方をしっかり支えておられる経産省さんと、静脈の方をいろいろ支えてきた環境省が一緒になって、そういう場をなるべく多く作ってコミュニケーションをよくしていく一つのきっかけになればいいと思っています。

○崎田　はい、ありがとうございます。コミュニケーションの場作りやプラットフォーム作りを進め、パートナーシップを促進していただくことが非常に重要だと思いますので、国や自治体の役割として積極的に進めていただければありがたいと思います。

先ほど環境省からお話があった第五次循環基本計画の指針に関して、静・動脈連携や地方創生に繋がるなど、重要なキーワードがかなり出てきていますので、ぜひ皆さんに最後に一言ずつ、何かご提案やコメントなどあればお話いただきたいとに思います。

秋田県の大門さんからいかがですか。

○大門　第五次循環基本計画の指針の方で当県のことを考えると、特に多種多様な地域の循環システムの構築と地方創生というのが、今後当県にとって重要なテーマでもありキーワードにもなっていくと考えています。当県においてもそれぞれの地域にある資源、技術といったいろいろな特性に応じながら、各主体で役割を分担し協力し合いながら、初めは小さな動きでもいいと思います。小規模ながらも持続可能な資源循環の仕組みが県内各地に生まれて、それが横に繋がりながら、連携しながら、相乗効果を発揮して、その地域全体が広域的に活性化に繋がる社会ができれば理想だと思っています。今回の指針の中で多種多様なというところをよく踏まえながら自らの足元をよく見ながら、今後の施策を進めていきたいと考えています。

○崎田　はい、ありがとうございます。県内各地に循環の輪ができてそれが複合的に強くなっていくという形になれば、素晴らしいと思います。力強く語っていただきました。それでは佐藤さん、お願いします。

○佐藤　私からは地域循環共生圏についてお話したいのですが、食料とエネルギーを地産地消をしながら、自立した地域を作っていくという考え方かと思います。その際、地域資源を可能な限り生かすという視点がとても大事だろうと思っています。そうした中で、食料について考えれば、やはり余剰分を都市部に回すというのは十分考えられるのですが、例えば地熱といった自然エネルギーについてはなかなか地元で使えるような形になっていない。なかなか恩恵を受けてないという実態があるかと思います。その意味で、地域にやはり利益がもたらされるような、そしてまた地域の方々がそれにコミットしているということが、見えるような形にしていくのがとても大事だと思っていて、その辺がこれからの課題になっていくと思っています。

○崎田　はい、ありがとうございます。今エネルギーの話などもありました。地域資源をしっかり活用しながら、循環圏を作っていく、皆さんで知恵を集めていくことが大事だと思います。それでは秋田エコプラッシュの小泉さん、よろしくお願いします。

○小泉　取組結果の積み上げでゴール時間を予測していくのではなく、2050 年カーボンニュートラル達成というゴールが決まっていて、逆算的にポイントごとの通過時間が決まっていると認識をしています。それを守るために何が一番必要なのかと言いますと、一人一人の認識、覚悟であると思っております。やらなければ次が無い、次の世代に皺寄せが及ぶと考えながら、秋田市民の皆さん、企業の皆さんとともに、リサイクルを進めていきたいと考えております。

○崎田　はい、ありがとうございます。一人一人の覚悟という話がありました。メーカーの皆さん、販売の

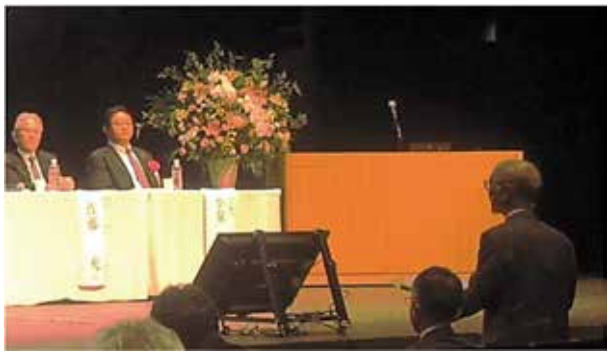
皆さん、消費者、それぞれが覚悟を持っていかなければいけない話だと思います。それでは浅利さん、これからの基本計画や、今後に向けての提案をぜひお願いいたします。

○浅利　基本計画に関しては崎田さんと一緒に私も入らせていただき、議論してきて、とてもいいものになってきていると思っています。そのできた計画に対してどういうロードマップを描いていくかは、皆さんのご発言にも繋がると思いますが、小泉さんの方でも、変革のペース配分がこれでいいのかというご発言がありました、今回のテーマであるイノベーションに関しても共創に関しても結構時間がかかることを覚悟しておかないといけないと思っています。最初は試行錯誤だと思います。今回、秋田県さんは、市町村さんとも連携して今実証中と言われてましたが、そういうことを恐れずどんどんやっていく中で、イノベーション、将来のインフラ、社会システムに繋がるようなものを見つけて、それをスケールしていくことが必要で、それにはやはり一定の時間がかかるので、残された時間は結構短いと感じています。それを覚悟して、みんなで一緒に、一人一人もそうですが、力を合わせてやっていくというステージに入っていくと思います。ある意味、すごくわくわくもしているところで、みんなで前向きに取り組んでいけたらいいと思っています。

○崎田　ありがとうございます。恐れずにいろいろと取り組んでいく、そういう時期にもう来てるのではないかと、みんなでわくわく、ドキドキしていければと思います。近藤さん、多くの皆さんから勇気をいただいたという感じがしますが、一言いただければと思います。

○近藤　現在循環基本計画の議論をしていますが、循環基本計画の前にできた環境基本計画の第一次は、1994年に閣議決定をされました。そのときのキーワードが四つありました。循環、共生、参加、国際です。国際は国際的取組で、共生は自然との関係です。その中の循環と参加は皆さんの話にもずいぶん出てきましたので、数十年経っても大変重要な概念であると、いかに地域で資源を回していくか、いかに多くの人が参加をしていくかが大事と今改めて感じたところです。来年の６月に向けて議論をしていますが、先ほど申し上げました通り、経済という面で言えば、動静脈連携が一つキーワードになり、また暮らしの面でいけば地域と暮らしをターゲットエリアにしてどういう新しい取組ができるかがキーワードになります。これらに知恵を絞っていきたいと思いますので、皆さんからもお知恵をいただければと思っています。

○崎田　ありがとうございます。本当は会場にお越しの多くの皆さんに質問やコメントをいただきたいのですが、そろそろ時間が迫ってきました。皆さんの代表という意味で、最初に基調講演をしていただいた細田先生に一言コメントをいただいて締めたいと思います。細田先生、よろしくお願いします。



○細田　私ごときが代表させていただいて申し訳ないのですが、感想を申し上げたいと思います。今伺っていて、いろいろ勉強させていただきました。例えば、浅利さんがデジタル製品パスポート、製品についてはそのプロファイル、履歴がデジタルで登録されていてみんながプラットフォーム上で使える、そうすると動静脈連携がしやすい。そのためにもう一つ、規格化・標準化もついてくるのだと思いますが、私は国もぜひお考えいただきたいと思います。ただこれはどちらかというとトップダウンです。EU はこういうのが大好きで、もう観念論的にこういうのを作っていく。それは悪くはないのですが、本当に繋げようと思ったら動静脈連携の一番の基本はコミュニティにあると思います。今日のお話しをうかがっていても、地域企業小泉さん、地域の NPO 佐藤さん、そういうところの繋がり、先ほど浅利さんの言われた社会課題の共有、日本はこれが少し弱いのではないか。少しでき始めていると思いますが、この協働というのが地域資源を使いながら、どうやって繋がってデジタル製品パスポートなどに集約していくかということが、私は今後の鍵となると、皆さんのご発言を聞いて強く印象づけられました。デジタル製品パスポートというのはテクノロジーのイノベーションですが、地域的に繋げるのはおそらく、秋田県もそうだと思いますが、環境省が根っこにいて、そしてコミュニティからのボトムアップを繋げていって、動静脈連携がどうやってできていくのか。私はこれは日本が得意だと思います。団体戦に強い日本の腕の見せ所です。欧州は個々の、インディペンデントの国ですから、DPP とかいっても個の繋がりは弱い。そこは日本では一つの大きなうねりになると思う。

一つのヒントはプラスチック新法で、リサイクル法の中で初めての循環の法律です。連鎖が全部繋がっている法律です。うまくいくかどうかはこれから努力が重要ですが、それがうまくいくと、小泉さんのところにはなるべく分別度の高いものが行って、元のプラ資源に戻ることが初めて可能になると思う。日本はその繋がりのモデルをもっともっと作っていく、それは地域、市町村、県ではないかと思うので、循環基本計画

に反映できるかどうかは別として、ぜひその辺をやっていただきたいと、今日は強く印象づけられ、勇気づけられました。ありがとうございます。

○崎田　細田会長ありがとうございます。日本は団体戦に強いという話があり、そうだな、と思いました。ひと昔前だと「全員野球」と言いましたが、秋田ですと・・・「All 秋田」で、コミュニティがつながりながら All 秋田で取り組む、地域あるいは様々な立場の方が、いろいろな情報を繋いでさまざまな協働を作っていきながら、技術イノベーションや、ライフスタイルやモノづくりといったさまざまなイノベーションを起こしていく。今日はそういうことを皆さんと共有できた大事な一日だったと思います。登壇してくださった皆さんに大きな拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。

（３）閉会挨拶

梶原成元氏（３Ｒ活動推進フォーラム副会長）

本日は第17回３Ｒ推進全国大会をこのように多くの方々のご出席をたまわりまして、盛大かつ成功裏に終わることができました。大変ありがとうございました。まずは、本日３時間半にわたり大会にご出席の皆様方に感謝を申し上げます。本日表彰の栄に浴された方々、さきほど議論いただきました登壇者の皆様方にも感謝を申し上げたいと思います。そして各出展団体の皆様方にも感謝を申し上げます。

秋田県は、副知事のご挨拶にもありましたが大変自然が豊かなところであります。そして言い換えれば、森林バイオマスに代表されるように資源が豊かなところであります。本日の議論の中でお示しいただいたように、秋田県は金属資源を利用する伝統的な産業があり、その産業の方々は現在では資源循環産業の雄としてご活躍になられています。そのような秋田県で、共創とイノベーションというテーマで議論できましたことは、大変よかったと思っております。その秋田県とともに、環境省様、環境省東北地方環境事務所の方々と主催者として大会を開催できたことに、深く感謝を申し上げたいと思います。このすばらしい会場、あきた芸術劇場ミルハスのスタッフの方々にも大変お世話になりました。

本日の議論の中で、地域と表現され、また上流下流あるいは静脈動脈、さまざまなキーワードがありますが、いずれの場合も産・官・学ではなく、産・官・学・民だという思いを改めて強く感じました。

今日の大会はこれで終わりますが、来年度の大会は埼玉県のご協力をいただき、さいたま市内で開催の予定です。引き続き、皆様方のご協力、ご支援をお願いいたします。

これからの時代は、単純に脱炭素でもなく、ネイチャーポジティブ、自然資本の保全だけでもなく、循環経済あるいは資源循環を含めて、これら全体が一つのかたちになって進んでいくべきものと考えています。その中でも資源をうまく使っていく、できるだけ地球に負担をかけないかたちで我々の幸せを求めていくという意味では、循環経済、資源循環、３Ｒが最も重要な任務を与えられています。今後もこういった大会を成功させて、この動きを盛り上げていきたいと思っています。本日は大変ありがとうございました。そして今後ともよろしくお願い申し上げます。

４．関連イベント

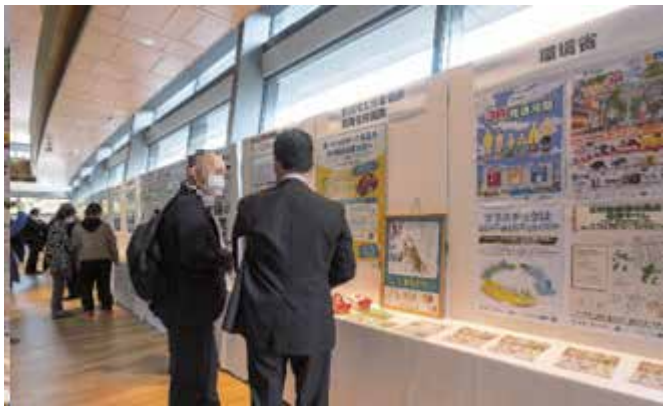
（１）３Ｒ推進展示コーナー　10 月 25 日（水）12:00～16:45

３Ｒ推進全国大会会場のあきた芸術劇場ミルハス 中ホール入口に続くメインホワイエに、３Ｒ推進展示コーナーが設けられました。令和５年度３Ｒ促進ポスターコンクールに入賞した 55 作品の展示のほか、循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナーには 24 団体が出展しました。開会前には、秋田県副知事神部秀行氏、秋田県議会議長北林丈正氏らが展示コーナーを訪れ、ブース担当者の説明を熱心に聞いていました。

【出展者】（順不同）

○環境省　○秋田県生活環境部温暖化対策課　○秋田県産業労働部クリーンエネルギー産業振興課　○３Ｒ活動推進フォーラム/公益財団法人廃棄物・３Ｒ研究財団　○リデュース・リユース・リサイクル推進協議会　○NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット　○３Ｒ推進団体連絡会　○ガラスびん３Ｒ促進協議会　○ＰＥＴボトルリサイクル推進協議会　○紙製容器包装リサイクル推進協議会　○プラスチック容器包装リサイクル推進協議会　○スチール缶リサイクル協会　○アルミ缶リサイクル協会　○飲料用紙容器リサイクル協議会　○段ボールリサイクル協議会　○秋田エコプラッシュ株式会社　○認定 NPO 法人環境あきた県民フォーラム　○株式会社ナチュラルエナジージャパン　○ユナイテッド計画株式会社　○ＤＯＷＡエコシステム株式会社　○長野県　○公益社団法人食品容器環境美化協会　○一般社団法人全国容器循環協議会　○一般社団法人プラスチック循環利用協会

展示コーナーを視察する神部副知事、北林県議会議長



展示コーナーには、主催者をはじめ、自治体、関連団体等多数出展されました。

（２）施設見学会　10月26日（木）9:15～12:00

本大会の関連イベントとして、大会翌日の10月26日（木）午前中に施設見学会が行われました。９時15分にあきた芸術劇場ミルハスで集合し、大型バス２台で秋田洋上風力発電および秋田バイオガス発電所を視察しました。参加者は32名でした。

秋田洋上風力発電では、国内初となる商業ベースでの大型洋上風力発電施設について、秋田港のＡＯＷ風みらい館で説明をいただいたのち、ポートタワー・セリオンの展望室から風力発電の様子を見学しました。

秋田バイオガス発電所では、食品廃棄物をメタン発酵させて生成したバイオガスで発電する工程について説明をいただき、施設の見学を行いました。

・ＡＯＷ風みらい館（秋田洋上風力発電株式会社）

秋田県秋田市土崎港西１丁目 10－45　秋田ベイパラダイス内１階

・秋田バイオガス発電（株式会社ナチュナルエナジージャパン）

秋田県秋田市向浜一丁目３番７号

AOW 風みらい館で説明を受ける参加者

セリオンの展望室から見た風力発電の様子

秋田バイオガス発電所を見学する参加者

5．資料

（1）第 17 回３Ｒ推進全国大会開催案内（参加申込書）

表面

裏面

（２）第 17 回３Ｒ推進全国大会ポスター

（3）参加者用パンフレット

1ページ

2ページ

3ページ

4ページ

（4）参加者アンケート

全国大会の参加者へ、大会終了後にメールにてアンケートのご協力をお願いし、Web ページから回答をいただきました。

① Web ページ　アンケート画面

第１７回３Ｒ推進全国大会アンケート

OME > 第１７回３Ｒ推進全国大会アンケート

秋田から始めよう！
３Ｒ・資源循環による持続可能な社会
第17回 in 秋田
３Ｒ推進全国大会
令和5年
10/25（水）
13:00～16:30
（受付開始 12:15）
(c)Odate city - home of Hachi & Akita dogs

第１７回３Ｒ推進全国大会にご参加をいただきありがとうございました。
今後に活かすため、アンケートにご協力をお願いいたします。

第１７回３Ｒ推進全国大会アンケート

1　大会全体について
○①大変満足　○②満足　○③普通　○④不満　○⑤大変不満

2　特によかったプログラムは何ですか（複数回答可）
□①表彰式
□②基調講演
□③パネルディスカッション
□④令和５年度３Ｒ促進ポスターコンクール入賞作品コーナー
□⑤循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナー

3　上記２で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

4　よいと思わなかったプログラムは何ですか（複数回答可）
□①表彰式
□②基調講演
□③パネルディスカッション
□④令和５年度３Ｒ促進ポスターコンクール入賞作品コーナー
□⑤循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナー

5　上記４で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

6　大会に参加して、３Ｒに対する意識に変化がありましたか。

○①意識に変化があり、行動につなげようと思った。
○②意識に変化はなかった。

7　上記６で①と回答された方は、具体的にどのように変化があったかをご記入ください。また、②と回答された方は、３Ｒにつなげるためにはどのように改善したらよいかご記入ください。

8　今回の大会は４年（３大会）ぶりの対面開催でしたが、そのことについてどうお考えですか。

○①大変満足
○②満足
○③普通
○④不満
○⑤大変不満

9　上記８で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

１０　今回の大会では、環境負荷軽減を考慮し、大会プログラムやステージプログラムはWEBでの配信とし、会場での配布は行いませんでしたが、そのことについてどうお考えですか。

○①大変満足　○②満足　○③普通　○④不満　○⑤大変不満

１１　３Ｒ推進全国大会について何でお知りになりましたか。（複数回答可）

□①案内状が送られてきた
□②ホームページ・メールマガジンを見て（具体的に）
□③新聞・雑誌（具体的に）
□④県等からの情報提供
□⑤その他（具体的に）

１２　大会運営について

○①大変満足　○②満足　○③普通　○④不満　○⑤大変不満

１３（施設見学参加者のみ）秋田洋上風力発電の施設見学について

○①大変満足　○②満足　○③普通　○④不満　○⑤大変不満

１４（施設見学参加者のみ）秋田バイオガス発電所の施設見学について

○①大変満足　○②満足　○③普通　○④不満　○⑤大変不満

１５　今後、施設見学会でどのような施設を見学したいと思われますか。

１６　あなたについてお尋ねします。

○ ① 都道府県職員
○ ② 市町村職員・一部事務組合職員
○ ③ 国家公務員
○ ④ ＮＰＯ・市民団体
○ ⑤ 廃棄物・リサイクル事業者等
○ ⑥ ⑤以外の企業・団体
○ ⑦ 大学、研究者、コンサルタント等
○ ⑧ 報道関係者
○ ⑨ その他（具体的に）

１７　ご意見・ご要望等があれば自由にお書きください。

確認 ›

お問い合わせ

第17回３Ｒ推進全国大会実行委員会事務局（（公財）廃棄物・３Ｒ研究財団内）
〒130-0026　東京都墨田区両国3-25-5　JEI両国ビル8階
TEL 03-6908-7311／FAX 03-5638-7164
Email: jimukyoku@3r-forum.jp

② アンケート依頼文

「第17回３Ｒ推進全国大会」アンケートご協力のお願い

返信　全員に返信　転送

2023/10/25 (水) 17:33

（３Ｒ推進全国大会へ参加登録いただきました皆様にお送りしております）

この度は、「第17回３Ｒ推進全国大会」にご参加をいただきありがとうございました。
今後に活かすため、アンケートを作成しました。
お忙しいところ恐縮ではございますが、アンケートにご協力をお願いいたします。
26日開催の施設見学会にご参加の皆様は、施設見学後にご回答をお願いします。
どうぞよろしくお願いいたします。

【第１７回３Ｒ推進全国大会アンケートフォーム】
https://www.jwrf.or.jp/3Rsymposium2023-anq.html

※アンケート回答締切日：11月1日（水）

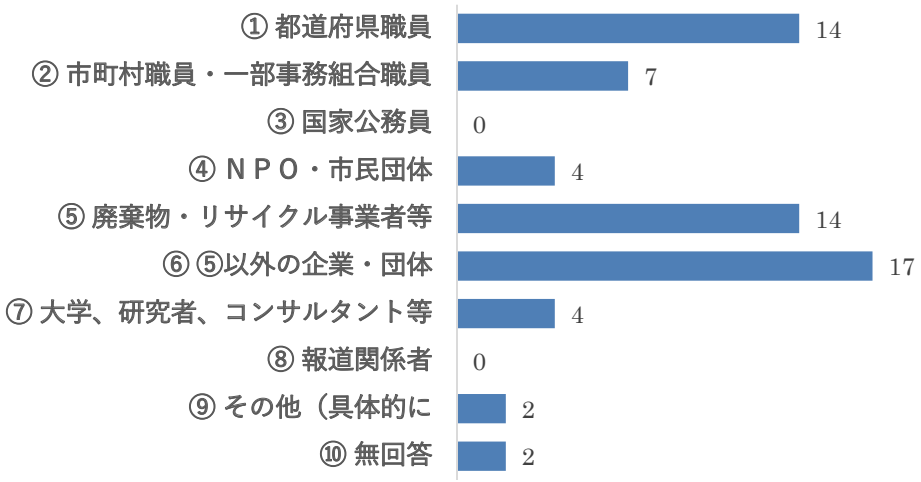
第17回３Ｒ推進全国大会実行委員会事務局（（公財）廃棄物・３Ｒ研究財団内）
〒130-0026　東京都墨田区両国3-25-5　JEI両国ビル８階
TEL：03-6908-7311　FAX：03-5638-7164

③ アンケート集計結果

回答数は 64 名でした。

【参加者の属性】

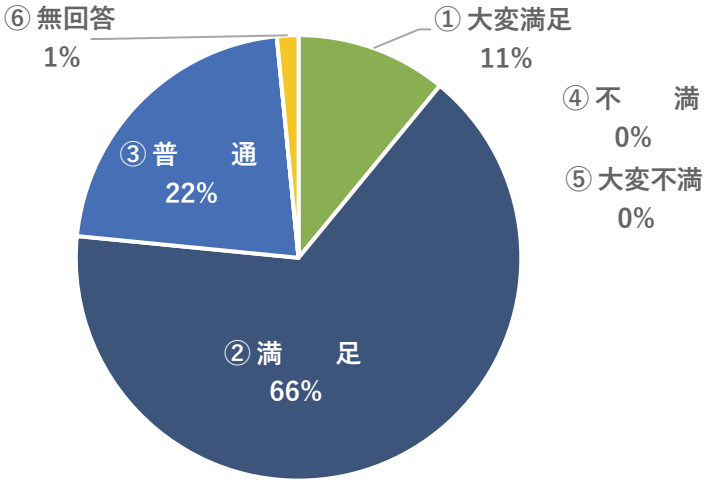
16. あなたについてお尋ねします。



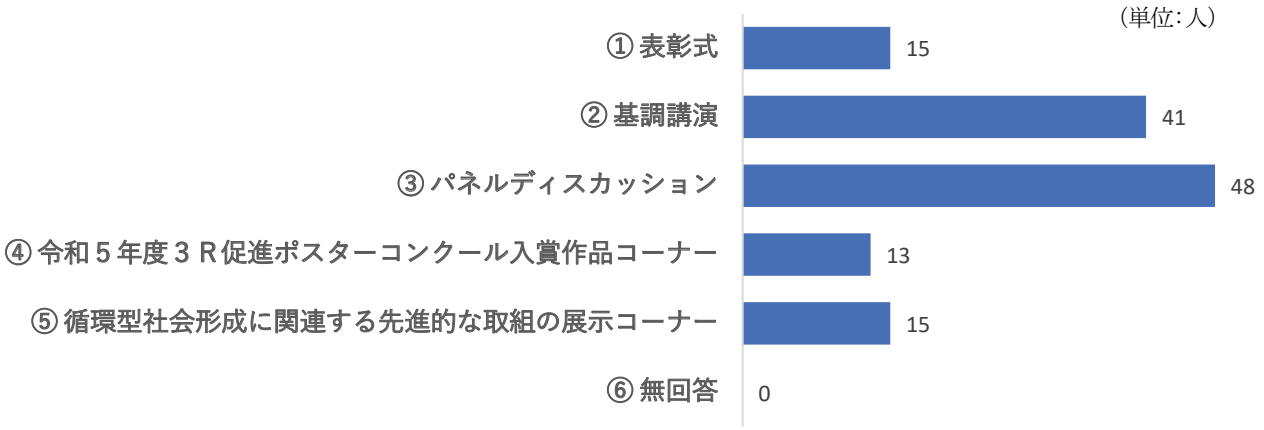
【プログラムの内容について】

1．大会全体について

① 大変満足
② 満　　足
③ 普　　通
④ 不　　満
⑤ 大変不満
⑥ 無 回 答



2．特によかったプログラムは何ですか（複数回答可）



３．上記２で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

＜①と回答された方＞

・ポスターコンクール入賞作品が素晴らしく表彰されているのを見て本当に心から拍手してしまいました。
・小学生の受賞者も緊張しないような配慮が感じられました。休憩時間を利用しての記念撮影も良かったと思います。
・表彰式では、表彰者が県外（熊本県や愛知県など）から来県いただくことで、秋田県のＰＲにつながったと思う。また、小・中学生の受賞者がかわいらしくほほえましかったことが印象に残った。
・表彰式は小学生が可愛くて。是非この子たちの為にもいい環境でバトンを渡したいですね。

＜②と回答された方＞

・基調講演の細田会長の見識はもっともである。しかしながら、2050 年カーボンニュートラルについて、その実行工程が教示されていなかった事が残念。本件は国管掌であるが、３Ｒの実行責任者としてもう少し踏み込んだ意見方向性を示していただければ、当方の様な素人（但し、秋田市地球温暖化防止推進委員）でも理解し、今後の対応の一助になるものと思料。
・細田先生の講演は初めて聞いたのだが、非常にわかりやすく良かった。
・年代毎のごみへの考え方の変遷が知れてよかった。
・歴史から入るあたり、非常に頭の整理になる。
・基調講演は、格式ばった用語が使われないなど、聴取者が理解しやすいような内容であったため、３Ｒに取り組もうとする人が増えたのではないかと思われる。
・今回、初めての参加でしたが、今に至るまでの過去からの経緯が分かり易く良かったと思います。又、具体的な例から協力協同への必要性と、一連の流れがとても分かり易くお話をいただいた点が、非常に良かったと感じております。
・循環型社会が安定に存在するためには循環経済の発展が是非とも必要である、という視点を基調にしていた。
・細田先生の３Ｒとサーキュラーエコノミーの区別についての解説が面白かったのでよかったと感じました。

＜③と回答された方＞

・様々な立場の意見を聞くことができ、今後の参考となりました。
・パネルディスカッションでは色々な取組を実際聞くことが出来、改めて自分の出来る事は何だろうと考えさせられました。
・パネルディスカッションについて短すぎず長すぎずの時間配分を気にしたためか、要点が絞られており聞きやすかったため。
・各界の代表者の意見を聞けたことは活動の参考になった。
・パネルディスカッションは皆さんの立場から色々な考え方が聞けて良かった。
・各人の取組が理解でき、どこで連携すれば効果が大きくなるかを考えさせられる内容だった。多種多彩な連携を導き実現するのも大変重要な仕事だと感じた。
・パネラーの方が一生懸命３Ｒに取り組んでいるのが伝わってきた。
・環境問題への無関心層に対し、普及啓発はどのようにしたらよいのかという疑問を持てた。
・いろいろな取組があること、また取組ごとの今後の方針等が知れてよかった。
・廃プラリサイクルの重要性を認識できた。秋田県大仙市での取組など興味深く拝聴しました。
また秋田エコプラッシュ株式会社での廃プラリサイクルの現状と、一般廃棄物からの廃プラリサイクル率が 50%で残渣処分となることなど問題点も知ることができ有意義なプログラムであったと思います。

・秋田県の取組を知るいい機会であった。
・パネルディスカッションは、資源の地産地消や、産・官だけでなく住民を取り込みながら、３Ｒを手段として地域における循環型社会を形成・推進していくことが重要であることが理解できた。
・次期循環計画の考え方や秋田県内の取組を分かりやすく紹介していただけて勉強になりました。パネラーどうしの質問のやり取りがあればもっと理解が進んだように思います。
・登壇者に偏りがないのが良かったと思う。
・環境省の考え方や方策について聞けて良かった。
・パネリストは全員、それぞれの立場で、循環型社会構築に向けて努力しておられる様子が伺われ、それら各活動の具体的な様子を引き出していただいたコーディネーターにも感謝したい。パネリスト発言の中では、プラスチックリサイクルに関して小泉氏が「現実を知るところから始め、覚悟をもって立ち向かう必要がある」、浅利氏が「2020 年学習指導要領が変更され SDGs が当然という教育体系になった」、大門氏が「豊かな自然を次世代にという基本理念の下でプラスチックごみの最適な処理方法を探っていきたい」、近藤氏が「地域循環システム創成を循環経済を入れて実現したい」等の発言が印象深い。

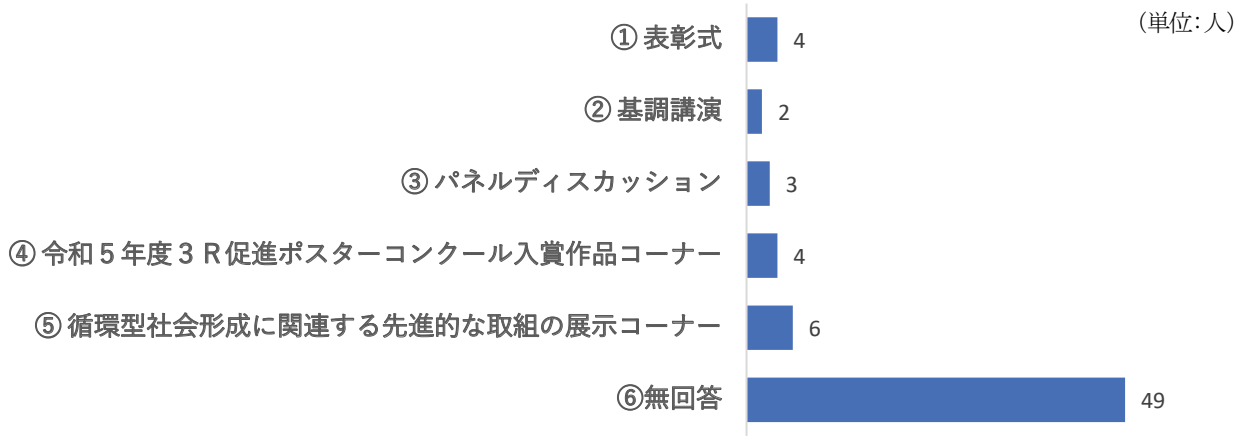
＜④と回答された方＞
・若い世代の人たちが、３Ｒについて考えていることがよく分かり、感銘を受けた。
・ポスターコンクール入賞作品の展示は、最優秀賞以外も優れた作品を見ることができた。
・入賞作品コーナーについては、次世代の子供たちが３Ｒに興味・関心を持ってくれるきっかけになっているのだなと感じることができたと思う。
・簡単な展示にしたところが良かった。この方法で十分だと思う。以前はお金をかけすぎだった。
・小学校中学年のポスターのテーマが良かったです。

＜⑤と回答された方＞
・他社の３Ｒ取り組み事例を知ることができ、当社の事業内容を知ってもらうことができた。
・エコプラッシュのハーブポットについては、鉢植えのサイズを想定していたが、帰りに展示されている現物を見て、手のひらサイズで小さいものだと知って驚いた。
・展示コーナーについては各社がどのような取組を行っているのかを知ることができ、また教えることができる為、よかったと思う。
・世の中でどのような取組がなされているか、参考になる。
・循環型社会形成に関連する先進的な取組の展示コーナーではいろいろ思いつかなかった方法で３Ｒに力を入れて、身近な取組も多く良い体験でした。

＜複数回答の方＞
・現在の３Ｒの現状についての理解が深まった。
・各関係機関の先進事例や取り組み及び現況・問題点等を直接聞けたことで今後の業務に反映させたい。
・過去からの系譜と最先端の活動紹介と課題など、大変勉強になりました。
・循環型社会構築、カーボンニュートラルに向けて、何をすべきか、視野が広がった。取組についていろいろ勉強になった。
・３Ｒに係る最新情報を得ることができた。
・業務の参考となったため。
・循環型社会の構築に向けての自身が持ち合わせない視点で課題や取組事例に関する情報を入手することができた。
・地球および人類を持続可能にしていくために、鋭意努力している組織および人物の存在を具体的に

知ることができた。個人としてできることにチャレンジしていきたい。

４．よいと思わなかったプログラムは何ですか（複数回答可）



５．上記４で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。

＜①と回答された方＞

・表彰式の時間が長い。１時間もかける必要はない。その分を他に回した方がよい。

・小、中学生への表彰は大変良いと思いますが、遠方より参加していることで移動を含め負担が大きい様に感じます。例えば、東京で環境大臣から表彰を受けるなどもありではないかと思います。（メデアからの情報公開も含め）

・良くないというわけではないですが、学生には不向きかもしれないのでチェックしました。

＜②と回答された方＞

・基調講演はパネルディスカッションと合わせると長かった。

・基調講演の時間が短かった。身内の方を選ぶのはいかがなものか。

＜③と回答された方＞

・コーディネーターは地球温暖化による気候変動を前提として話をスタートさせていたが、私はそもそも地球温暖化とやらに対して極めて懐疑的だから。なお、温暖化があってもなくても３Ｒが持続可能な社会の実現のために大切なのは、言うまでもない。余談だが、SDG’s というものにも胡散臭さを感じている。そもそも、欧米人の作った土俵にホイホイ乗らなくても（乗せられなくても）、我国には近江商人の三方良しをはじめとする先人の知恵があり、それを活かしていけばよい。10 年経ってもカタカナ語のままの概念には、碌でもないものが多いと考えている。

・パネルディスカッションの登壇者にもっと女性がいたほうがいい。特に地域の方は、トップの男性ではなく実践している女性にして現場感覚の話が聞きたい。

・パネルディスカッションは、平凡な印象だった。もっと活発な、刺激的な、或いは未来を展望できるようなやり取りがあると良い。壇上の方が男性が多かったが、せめて男女半々にすべきだと思う。組織のトップの方は年配の男性が多いが、このような場には、トップの方ではなく、現場の方、そのプロジェクトの第一線で関わっている方を出した方が良い。

＜④と回答された方＞

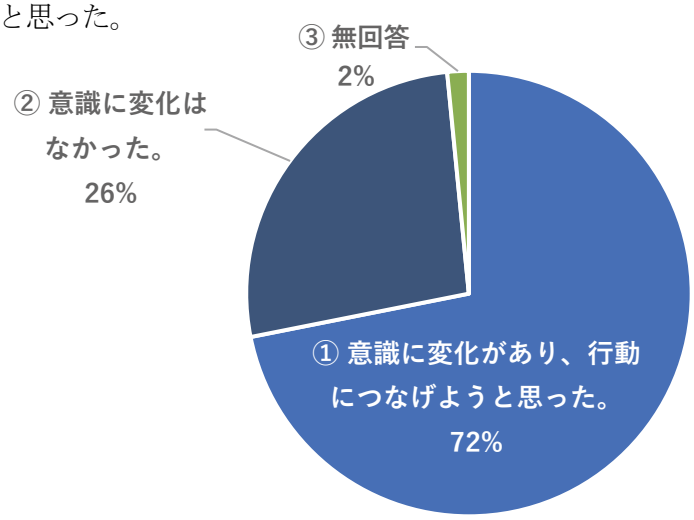
・ポスターのデザインが単調で内容が類似しているほか、入賞理由が判らない。全国規模で募集する必要があるのか。開催県で良くないか。

＜⑤と回答された方＞
・休憩時間を長くとった際に、もう少し「ぜひ見に行ってください」とアピールしても良かったかもしれません。場所をもう少し広くとれば大勢で賑わうようになると思います。
・内容は大変素晴らしかったのですが、会場に入ってしまうと途中１回の休憩時間以外は展示を見ることができず、セッションが終わったらすぐに片付けが始まってしまったので、ゆっくり見ることができませんでした。終了後も一定期間展示を続けていただけると参加者としてはありがたかったです。
・通過される方が多く、もう少し展示側からプッシュする時間枠があってもよかったと感じた。
・展示スペースの都合からか、展示件数が物足りなかった。
・展示内容はどれも良かったが、説明者が積極的に来場者への声掛け等を行わず、ただ立っているだけのブースがほとんどだった。
・受付の案内標識が左側にあり、受付を目指す人の流れも左へと向かっており、取組の展示コーナーは正面で目に入ったことから曲がってからも目が行ったが、入賞作品コーナーについては、帰りにようやく目に入り、展示があったことに気づいた。

＜全体として＞
・それぞれ工夫されたプログラムで、良かったと思っております。
・よいと思わなかったプログラムはない。すべてが３Ｒの達成を目指して努力している。素晴らしい。

６．大会に参加して、３Ｒに対する意識に変化がありましたか。

①意識に変化があり、行動につなげようと思った。
②意識に変化はなかった。



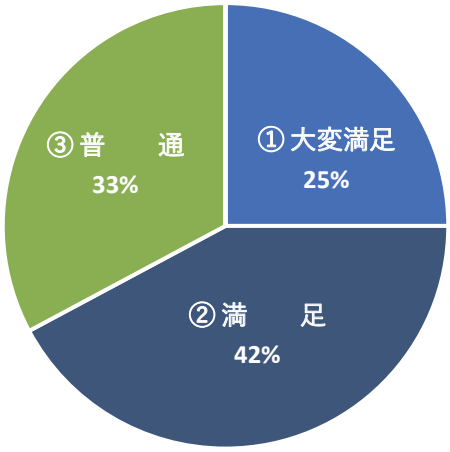
７．上記６で①と回答された方は、具体的にどのように変化があったかをご記入ください。また、②と回答された方は、３Ｒにつなげるためにはどのように改善したらよいかご記入ください。
＜①と回答された方＞
・産官学民というキーワードを念頭において行動します。
・他社の３Ｒ取組事例を知ることができ、当社の事業内容を知ってもらうためにどのような工夫点があるかヒントを得ることができた。
・一人一人の意識が重要だと感じたので、日頃から３Ｒを意識して生活していきたいと思う。
・３Ｒを理解していない一般市民が多いように感じる。特に秋田県の食品ロスは看過できないレベル。

秋田県人の接待文化（多買小費）は間違いでは無いだろうが、３Ｒの重要性を周知することが最短であると推測。
・子供達の環境への関心が高いことに驚いた。市民団体との連携強化が課題であること。
・ペットボトルのキャップは燃えるごみだと何となく刷り込まれていました。プラごみに混ぜても選別でリサイクルされないと伺い、今後は専用のBOXに入れるようにしたいと思います。
・今まで、どちらかというと企業の役割や行政の役割が大きいと考えていたが、一般市民（自分）が積極的に３Ｒに取り組む必要性を感じた。細田先生講演の中で高山市の話があったが、私は高山市出身でして実家では家庭ごみの分別が非常に細かくされています。秋田市でもやれるのではないかと思いました。
・プラスチックごみの課題を地域内で解決するために、どのように市民に啓発するかが重要と感じた。行き過ぎの地域もあり、バランスも大事だと思う。
・連携の重要さが感じられた。
・現在の状況に満足せず、各個人・家庭・職場・地域で実施可能なものを取り入れていきたい。
・微力ですが、環境に関わる仕事で40年になります。規模が極めて小さいサイトで、講師を引き受ける事もありますので、多くの情報をいただき、感謝しておりおます。
・家庭ごみの分別から意識して取り組んでいきたい。
・地域だけでなく、企業においても社外とのコミュニケーションと連携を考える必要があると思いましたので、その視点を業務に取り込む。
・プラスチック分別は、汚れたものや他の素材とくっついているものは特に面倒で分別しないこともあるが、一度分別できないかは考えようと思った。
・現在進めている、産業用一般廃棄物及び産業廃棄物の分別と排出をより進めていく重要性を再認識しました。
・日本国内における食品ロスが多いことを改めて実感しました。普段は数日分の食料をまとめて購入していますが、使いきれずに食材が傷んでしまうことがあります。食べきれる分を購入する、商品棚手前の賞味期限の早いものを購入する等、食品ロス低減につながる行動をとっていきたいと思います。
・地域との繋がりの重要性、また一人一人が３Ｒに対して考えてどう行動するかによって大きく変わる為、まずは自分から変わっていかなければ感じた。
・検討している事業の参考となったため。
・更にごみの分別の啓発をして、市の一般廃棄物をリサイクルにつなげようと思った。
・今後、仕事における企画立案にサーキュラーエコノミーに関する考え方を取り入れていこうと考えております。
・３Ｒ推進は、誰かがやってくれるでなく、企業・自治体・市民（消費者）の全員参加が必要不可欠と感じました。
・あまり時間がないと改めてかんじたので。
・日頃の生活において、無駄をなくしたい。加速度的に３Ｒ活動に参画していきたいと思いました。それには、個人的にはもちろんですが、国・自治体の活性化がさらに必要と思いました。
・ごみに関しての分別を今まで以上に意識すると共に、他の人へも共有して広めていきたいと思います。自身行っている地方創成の活動は、重なることもあり、これからも継続していこうと思います。
・各事業分野で資源循環の取組が紹介され、弊社も資源回収の取組をさらに積極的に行っていくことが必要であると再認識した。
・自分自身の研究がリサイクルと環境影響評価に関連しているので、視野が広くなりました。
・３Ｒに取り組んでいる事例を把握できて、同様のことにチャレンジしていきたい。自分でできることに取り組むことが大切だと思う。

<②と回答された方>
・今も３Ｒを強く意識している。３Ｒにつなげるためにも、ポイ捨てなどを減らしていけるよう、取り組んでいきたい。
・３Ｒに関連する仕事に携わっていて、３Ｒの必要性や重要性を理解している。
・自分では３Ｒを実践していると思っているが、家族も含めて周りの人たちに実践してもらうため、どう働きかけていくかが課題だと感じている。
・もともと３Ｒに対する意識があるため変化はない。無関心層へ意識啓発していくことが重要と考える。
・「循環経済」が安定な形で回り続けるように、産・官・学・民の協働体制を作って欲しい。
・個人・団体・企業などが３Ｒを推進することで、お金を得られる分かりやすい仕組みをもっと整備したらよいと思う。

８．今回の大会は４年（３大会）ぶりの対面開催でしたが、そのことについてどうお考えですか。

① 大変満足
② 満　　足
③ 普　　通
④ 不　　満
⑤ 大変不満
⑥ 無 回 答



④不　満
0%
⑤大変不満
0%
⑥無回答
0%

９．上記８で回答いただいたものについて、その理由をご記入ください。
<①と回答された方>
・パネルディスカッションを会場で聞けたため。
・取組（挑戦）や経験を直接聞けたことが良かった。
・地元秋田で細田先生をはじめとする先生方の考え方を直接聞けた。
・今後とも、とくに国レベルでの支援が必須と考えるから。
・展示コーナーはやはり対面で体験しないといけないので、満足しました。
・多くの参加者の熱意を直接感じることができた。社会を動かしていこうとする行動力に敬意を表したい。

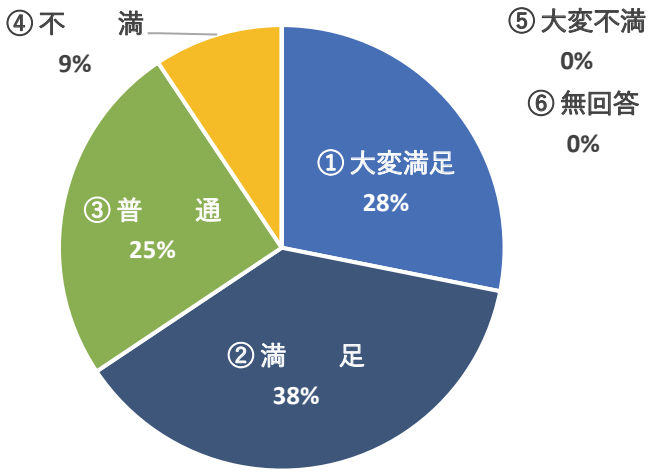
<②と回答された方>
・リモートでは得られない情報があります。
・様々な方々とご挨拶や意見交換を行うことができた。
・臨場感があると講演にも説得力があるように感じます。また、ミルハスは新しい設備で、心地良かったです。
・表彰式は、対面で行うことで有意義なものになることを確認しました。
・施設見学会は対面でないとできないと思うので。

・開催地が近かった。
・他業種の方と話をする機会が得られる。
・なかなか自県で開催される場合以外は参加できないものの、開催される会場に行って五感を使うことで自分の理解が促進される気がする。
・環境に対する配慮からプログラム配布がありませんでしたが結局、会社で印刷する為、配布した方が個人的に良かったかと思います。
・臨場感があり、登壇された先生方のメッセージがよく伝わってくると感じられたため。
・会場全体の雰囲気、登壇者の表情等が把握でき、各情報が入ってきやすい。
・３Ｒへの興味・熱い思いなどが直接感じることができたため

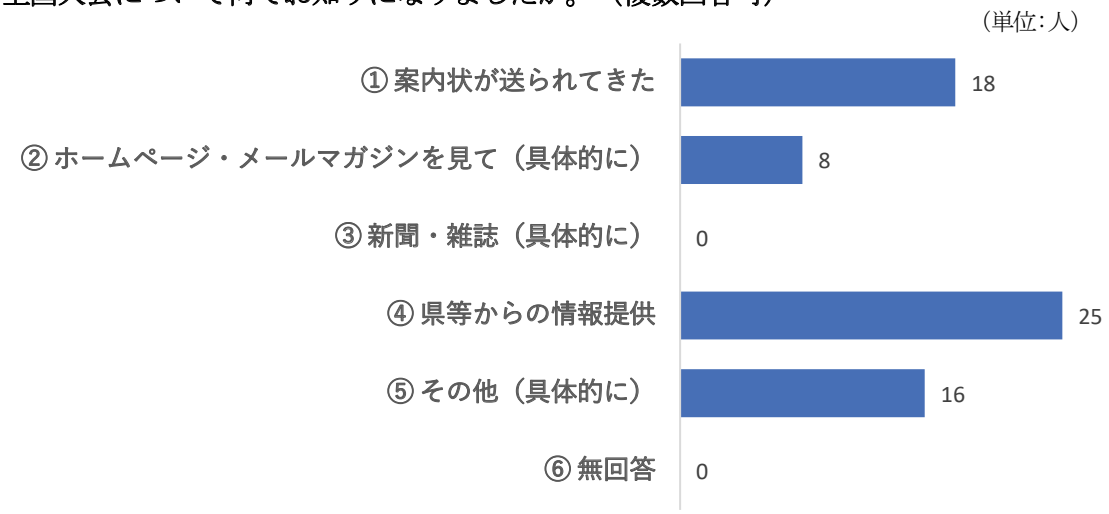
＜③と回答された方＞
・全国大会なので他県から来られる方は大変かとは思いましたが、最近リモートが多かったので実際会場に行けて直に聞かせていただけてやはり違うものを感じました。
・当方、素人でたまたま秋田市開催であったため現場での参加。この様なフォーラムが今後とも継続開催されることを希望するが、居眠りする大学教授もいるようで、マンネリ化しないことを切に希望する。
・全国規模の大会にしては参加者が少ないこと。開催県の関心が低いこと。展示コーナーの貧弱さ。資料配布は行わず参加者の対応に任されているが、資料持参している人はほとんどいなかった。分厚い資料は不要だが、コンパクトにまとめたタブロイド判１枚は配布してほしい。参加者名簿も欲しい。
・情勢に合わせて対面式を控えるのは仕方のないことだと思う。
・対面開催以外の大会を見たことがないため。
・はじめての参加でした。対面でお話を聞けるチャンスでしたので、もう少し会場とのコミュニケーションがあっても良かったのではと、思います。また、遠路、お出でになることができない方のために、オンライン参加もあってよいのではないでしょうか。
・コロナ禍を経ての大会だったが、コロナ前と特に変わった、進化したという印象が無かった。

10. 今回の大会では、環境負荷軽減を考慮し、大会プログラムやステージプログラムは WEB での配信とし、会場での配布は行いませんでしたが、そのことについてどうお考えですか。

① 大変満足
② 満　　足
③ 普　　通
④ 不　　満
⑤ 大変不満
⑥ 無 回 答



11.　３Ｒ推進全国大会について何でお知りになりましたか。（複数回答可）

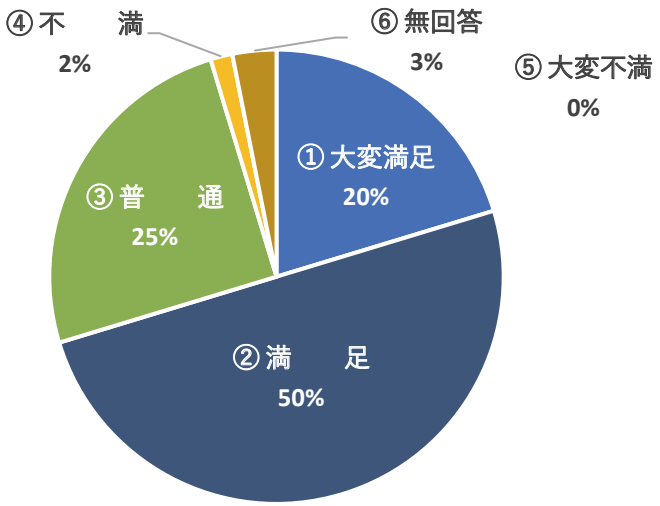


＜②「ホームページ・メールマガジンを見て」と回答された方＞
・環境省
・ＮＰＯ法人関連機関からの案内
・本財団のメールマガジン
・(公財)廃棄物・３Ｒ研究財団の３Ｒ・廃棄物ニュース
・秋田県温暖化対策推進センター
・メルマガ

＜⑤「その他」と回答された方＞
・大学の教授からの連絡
・秋田駅構内のポスター
・３Ｒ推進団体連絡会
・社内での情報提供
・グループ会社からの案内メール
・取引業者のメールマガジン
・社内の参加者募集メール
・浅利先生からの紹介
・知人からの情報
・研究室の先生
・インターネットで検索
・出展団体
・会社業務として知った

12.　大会運営について

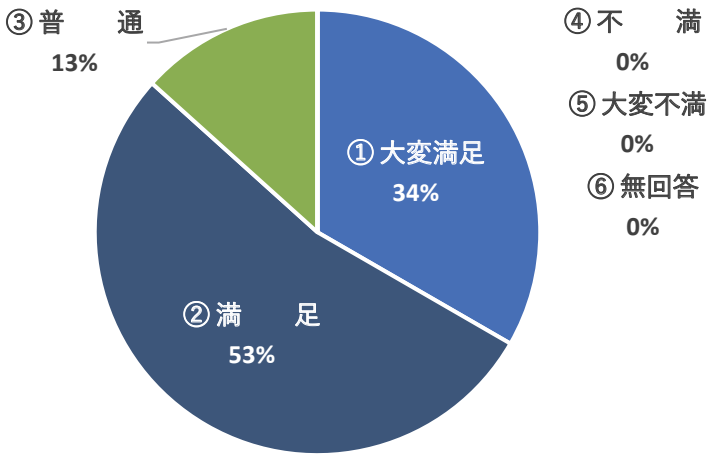
①　大変満足
②　満　　足
③　普　　通
④　不　　満
⑤　大変不満
⑥　無　回　答



【施設見学について】

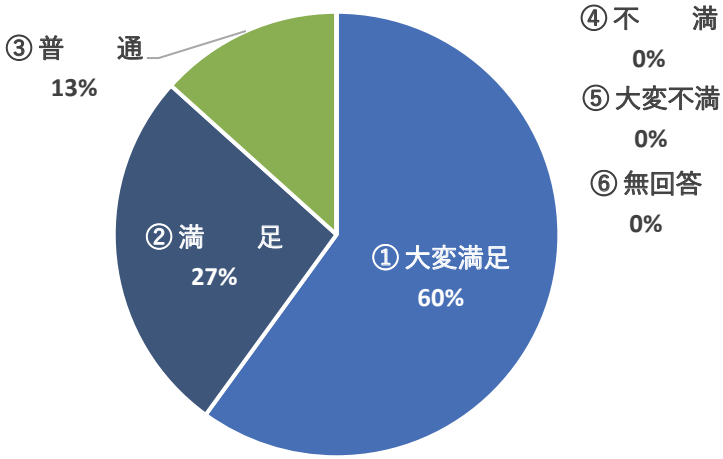
13.　（施設見学参加者のみ）秋田洋上風力発電の施設見学について

① 大変満足
② 満　　足
③ 普　　通
④ 不　　満
⑤ 大変不満
⑥ 無 回 答



14.　（施設見学参加者のみ）秋田バイオガス発電所の施設見学について

① 大変満足
② 満　　足
③ 普　　通
④ 不　　満
⑤ 大変不満
⑥ 無 回 答



15.　今後、施設見学会でどのような施設を見学したいと思われますか。

・洋上風力発電やバイオマス発電に関する施設
・スーパー等での廃プラの回収状況。
・今回は参加できませんが、今後も再エネ設備やそれを活用した取組が見られたらいいと思います
・地熱発電。鉄のリサイクル施設
・洋上風力発電のような最新の施設。今回は少し時間が短く感じたが、午前中で全て終了するのは良いと思うので、長くしてほしいという要望もしにくいのが正直なところである。
・廃プラを含む総合的なリサイクル、再資源施設の見学があってもよい。
・循環型経済に関わる業種（施設）がいいと思います。
・AI 等のデジタル技術を使用して、選別・分離を行っているリサイクル施設。
・グリーン水素関連施設
・エネルギー関係。今回の洋上風力の見学が日程の都合で参加できなかったのは残念だが。
・その地域で特色のある３Ｒ取組施設
・表彰企業の施設

・廃プラスチックのリサイクル工場様
・再生可能エネルギー利用形態の新展開、他地域への拡散可能な技術紹介が関わるような企画を期待する。
・リサイクル施設
・排出事業者の分別の工夫、研究施設　など
・予想もつかない取組をしている組織や大規模に取り組んでいる組織を見学してみたい。
・海外の案件を扱う企業を訪問したい。

（５）報道掲載記事

環境省、3R活動推進フォーラム他

秋田市で第17回３Ｒ推進全国大会を開催へ

循環型社会実現に向け

10月25日に、26日は施設見学も

3R推進全国大会プログラム

ウエイストマネジメント　10 月 5 日

循環型社会 実現目指せ

3R推進全国大会 本県初開催、250人参加

循環型社会の実現を目指す「第17回3R推進全国大会」が25日、秋田市のあきた芸術劇場ミルハスで開かれた。県内外から市民団体や行政の関係者ら約250人が参加し、環境問題への理解を深めた。

環境省と県、3R活動推進フォーラム（東京）の主催。ごみのリデュース（発生抑制）、リユース（再使用）、リサイクル（再生利用）の3Rに関する理解と取り組みを促進する目的で、2006年から都道府県の持ち回りで毎年開催されている。本県が会場となるのは初めて。

大会では、推進フォーラムの細田衛士会長が講演した。再利用や再資源化を繰り返す「循環経済」の構築のためには、同業種間や異業種間での連携や協力、協働が不可欠だと指摘。「経済構造改革と、市民による地道な3R活動を同時に進めていくことが重要だ」と述べた。

循環型社会形成推進功労者として11個人・団体が、環境大臣表彰を受けた。県内からは、リチウムイオン電池のリサイクル事業を手がける「エコシステム秋田」（大館市）と、松くい虫被害防止活動に取り組む「炭やきで夕日の松原まもり隊」（秋田市）が選ばれた。（石井ひかり）

本県で初開催された3R推進全国大会

秋田魁新報 10月26日

循環型社会の実現に向けた「3R推進全国大会」が秋田で初めて開催された。その一環で26日、秋田県の内外の行政やNPO法人の担当者が、食品廃棄物からエネルギーをつくる秋田市のバイオガス発電所を視察した。 「3R推進全国大会」は、循環型社会の推進を目指そうと環境省などが2006年から開いているもので、県内開催は初めて。3Rは、ごみの「リデュース」「リユース」「リサイクル」を指す。 26日は、県の内外のNPO法人や行政の担当者など約40人が、2017年に稼働した秋田市向浜にある県内唯一の「バイオガス発電所」を視察した。 食品廃棄物を発酵させることで生じるメタンガスを燃料に発電するシステムで、年間発電量は約523万キロワットアワー、一般家庭1750世帯分に相当する。 発電所では、燃料となる食品廃棄物を秋田市のホテルやスーパー、コンビニエンスストアなどから集め、24時間発電させた電力全てを、一定の価格で東北電力ネットワークに売電している。 視察した人たちは、時折質問しながら、担当者の説明に熱心に耳を傾けていた。 埼玉県の職員：「今までごみにしていたものを資源として活用する取り組みは、埼玉県もできるところから取り入れていきたいと感じた」 NPO法人理事長（奈良県）：「生ごみを処理して活用していくことや肥料になっていくことを知り、資源が循環していて面白いと思った」 一行は秋田市の洋上風力発電も見学し、脱炭素社会への一歩進んだ取り組みに関心を高めていた。 2024年の3R推進全国大会は、埼玉県で開催される。

秋田テレビ LiveNews あきた 10月26日

秋田市で3R推進全国大会

環境省、3R活Fが主催

秋田市のあきた芸術劇場ミルハスで開催された全国大会のようす

角倉良次長

細田会長

第17回3R推進全国大会が25日、秋田市で開催された。環境省などが2006年から開いているもので、県内開催は初めて。3Rは、ごみの「リデュース」「リユース」「リサイクル」を指す。

秋田県3R活動推進フォーラムの主催により、秋田県秋田市のあきた芸術劇場ミルハスでオンラインによる参加も含めて約250人が参加した。

同大会は、新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年は中止、21年は規模を縮小して開かれた。第17回の今年は、3年ぶりに現地での対面開催となった。

冒頭、環境省の角倉一郎大臣官房審議官が「3Rは、地球温暖化対策、資源の有効活用、廃棄物の適正処理などの観点から、循環型社会の実現に向けて重要な取組だ。今後、国民の皆様に3Rの推進を呼びかけていく」とあいさつした。

続いて、細田衛士会長が「循環型社会形成推進功労者」として、リチウムイオン電池のリサイクル事業を手がける「エコシステム秋田」（大館市）と、松くい虫被害防止活動に取り組む「炭やきで夕日の松原まもり隊」（秋田市）の2団体を表彰した。

また、「循環型社会のシンクタンク」を目指すインバージョン（東京）の代表ディスカッションが行われた後、角倉良次長、NPO法人秋田県自然共生社会づくり市民ネットワーク理事長の鈴木正貴さんが「地域の資源を活用した新しい価値の創造」をテーマに対談した。

次に、「循環型社会形成推進功労者」として、リチウムイオン電池のリサイクル事業を手がける「エコシステム秋田」（大館市）と、松くい虫被害防止活動に取り組む「炭やきで夕日の松原まもり隊」（秋田市）の2団体が表彰された。

大会では環境大臣表彰も行われた

同大会は、新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年は中止、21年は規模を縮小して開かれた。第17回の今年は、3年ぶりに現地での対面開催となった。

冒頭、環境省の角倉一郎審議官が「3Rは、地球温暖化対策、資源の有効活用、廃棄物の適正処理などの観点から、循環型社会の実現に向けて重要な取組だ。今後、国民の皆様に3Rの推進を呼びかけていく」とあいさつした。

続いて、細田衛士会長が「循環型社会形成推進功労者」として、リチウムイオン電池のリサイクル事業を手がける「エコシステム秋田」（大館市）と、松くい虫被害防止活動に取り組む「炭やきで夕日の松原まもり隊」（秋田市）の2団体が表彰された。

また、「循環型社会のシンクタンク」を目指すインバージョン（東京）の代表ディスカッションが行われた後、角倉良次長、NPO法人秋田県自然共生社会づくり市民ネットワーク理事長の鈴木正貴さんが「地域の資源を活用した新しい価値の創造」をテーマに対談した。

次に、

2023年度3R推進ポスターコンクール最優秀賞作品

2023年度推進団体各賞(地域推進団体優秀賞&団体奨励賞)

3R活動優良企業(企業)
カートレッジプジョーン(青森県)
エコシステム和田株式会社(秋田県)
株式会社ミル(京都府)
ポモ美濃株式会社大島製造所(岐阜県)
株式会社丸山製之発酵工(鹿児島県)

3R活動推進功労(団体)
民やまりクロの松原まち隊(秋田県)
一般財団法人石巻正和記念財団(東京都)
特定非営利活動法人国際アンティーシュエイド協会(静岡県)
一般社団法人 BRIDGE (KUMAMOTO)(熊本県)
相生商業高校高度科学技術プロジェクト(兵庫県)

3R活動推進功労(個人)
谷野メキチ(滋賀県)

秋田から始めよう!

3R・資源循環で持続可能な社会へ

※第17回3R推進全国大会in秋田
文・手仁雪絵(3R活動推進フォーラム専務理事)

第17回3R推進全国大会の概要

廃棄物、環境教育関係者、地方自治体関係者、民間団体、3R活動推進フォーラム主催による第17回3R推進全国大会が、10月25日(水)から、あきた芸術劇場ミルハスにて開幕した。同時に、3Rに関する「ウイルス感染防止」対策をコロナ禍の4年ぶりとなる通常開催となった。

大会は第1部式典、第2部記念シンポジウムで構成され、第1部式典では、2023年度環境省社会貢献推進3R功労者環境大臣表彰と2023年度3R推進ポスターコンクール最優秀賞の表彰を行った。第2部の記念シンポジウムでは、「循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション2050年カーボンニュートラルの実現に向けて」をテーマに、記念シンポジウムを行った。

会場には、受賞予定者に展示コーナーを設け、2023年度3R推進ポスターコンクール入賞作品応募作品や、関連団体による活動紹介や取り組み、環境省、環境省北海道地方事務所、秋田県庁の活動による取り組みや活動の展示を行った。また関連イベントとして、大会前日の10月24日には路線バスを利用した「循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション2050年カーボンニュートラルの実現に向けて」をテーマに、記念シンポジウムを行った。

会場でのの4年ぶりの通常開催となった第17回3R推進全国大会

第1部 記念式典

第1部記念式典では、主催者が順次あいさつを行ない、環境省から環境再生・資源循環局の負担一部浅見が、受賞者に賞状を渡すとともに、「循環型社会形成推進基本法の施行10年目の節目を迎えるにあたり、改めて3R推進の重要性を認識するとともに、それぞれの立場で力を尽くすことが求められていると思った。

続いて秋田県から佐竹秀行副知事が、県内からの参加者に歓迎の言葉を述べ、取り組み、自然や文化、人材のポテンシャルを最大限に活用し、県民、事業者、行政が一体となって循環型社会の実現を推進していくことを紹介した。

この後、同じく来賓として3R活動推進フォーラムの新田信士会長(東海大学教授)、来賓を代表して佐田浩会の金林文正議員が挨拶をされ、あいさつを行った。

続いて行われた表彰式では、環境省社会貢献推進功労者環境大臣表彰(4名)、3R推進ポスターコンクール最優秀賞(4部門4人)の表彰を行い、環境省西北海道地方事務所長から賞状を授与した。

第2部 記念シンポジウム

記念シンポジウムでは、基調講演及びパネルディスカッションを行った。

基調講演では、「3R・資源経済の加速化に向けて」と題して、3R活動推進フォーラムの新田会長が講演を行った。講演では、日本人は欧米人に比べ環境に優いところがあること、循環経済推進のためには同業種間、異業種間、さまざまな分野の連携・協力、協働がポイントであること、これらを社会実装するための基盤や仕組みの役割に期待することなどが、わかりやすく説明された。

続いて、「循環型社会の実現に向けた共創とイノベーション」をテーマにパネルディスカッションが行われ、コーディネーターにはさまざまな活動推進フォーラム副会長が、また、特定非営利活動法人静岡県国際協会理事長・佐藤良太氏、一般社団法人BRIDGE(KUMAMOTO)理事・代表理事・事務局長・佐藤良太氏、一般社団法人相生商業高校高度科学技術プロジェクト顧問・大西信氏、環境省環境再生・資源循環局廃棄物対策課課長・佐藤良太氏、環境省北海道地方事務所長・佐藤良太氏、秋田県庁生活環境部廃棄物・リサイクル推進課課長・大内信氏、環境省環境再生・資源循環局廃棄物対策課課

秋田市で3R推進全国大会を開催

4年ぶりの現地開催に会場は熱気

第17回3R推進全国大会が9月7日、秋田に、環境省、環境省東北地方環境事務所、秋田県、3R推進専門フォーラムの主催により、秋田県秋田市のあきた芸術劇場ミルハスのホールをメイン会場に開催された。

同大会は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年3月、昨年、一昨年も開会からのオンラインによる配信となっていたが、4年ぶりに現地での対面開催となった。「秋田から始めよう！ 3R・資源循環による持続可能な社会」と銘した今回の大会には、約250人が参加することになり、会場は熱気に包まれた。

当日は、第1部の大会式典と第2部の記念シンポジウムの2部構成による進行となったほか、会場入り口周辺には、3R啓蒙展示コーナーも設けられ、こちらも多くの来場者でにぎわった。第1部の大会式典では、開催に先立ち主催者による挨拶が行われたほか、環境省環境再生・資源循環局の井倉一郎次長は、現在、第5次循環基本計画の見直しに向けた検討を進めていることを説明したう

全国大会は、秋田市のあきた芸術劇場ミルハスで開催された

当日は環境大臣表彰なども行われた

とって「循環型社会の実現に向け、今後どのような取り組みが必要なのか、それぞれの立場で考えを深めてもらいたい」と大会の成功に期待を寄せた。

また、「対面でのリアルな出会いと交流を通じて共感を分かち合い、世代人の知恵と知恵をつなげて起こすイノベーションによって、循環型社会形成の先にある明るい未来が広がってくることを確信する」とも語り、今大会が4年ぶりの対面での開催になったことを祝福した。さらに、秋田市長佐竹敬隆副知事、3R推進専門フォーラム会長の細田衛士筑波大学教授、来賓として駆けつけた衆参議員秋田県議会議員からも、現地での開催を祝う言葉が寄せられた。

続いて、環境型社会形成推進室治治室環境大臣賞と3R推進ポスターコンクール環境省長官賞が発表された。受賞者のそれぞれの取り組みや作品が紹介された後、各賞表彰式が行われ、受賞者の喜びの声が聞かれたほか、受賞者の高橋百合子受賞者は、展示コーナーでも詳しく紹介され、多くの参観者の目に触れる、絶好の機会となった。

さらに、第2部の記念シンポジウムは、「循環型社会の実現に向けた挑戦とイノベーション～2050年カーボンニュートラル実現に向けて～」というテーマのもと開催された。シンポジウムでは、細田フォーラムの細田会長が、「3R・循環経済の加速化に向けて」と題した基調講演を行った。細田会長は、日本の廃棄物処理の歴史的変遷を説明したうえで、「循環型社会」や「循環経済」などでわかりにくい部分もあるが、「3R」は、様々な主体が何をするべきかがわかりやすく、今後も重要になるとした。

また、「循環型社会の実現に向けた挑戦とイノベーション」をテーマとしたパネルディスカッションが、同フォーラム副会長でNPO法人市民可能な社会をつくる元気ネット理事でもある岡田和子氏をコーディネーターとして開催された。

加えて、関連イベントとして廃棄物学会も開催された。同内容となる講演・パネルでの大学学生・高専生発表である、「秋田県立大学高専」について説明が行われたほか、食品廃棄物のメタン発酵で生成されたバイオガスによる発電を行っている「秋田バイオガス発電所」の紹介が行われた。

都市と廃棄物 12 月号

※カラー版は、３Ｒ活動推進フォーラムのホームページからダウンロード可能です。
https://3r-forum.jp/activity/meeting/index.html

第 17 回３Ｒ推進全国大会

開催報告書

令和 6 年 2 月

第 17 回３Ｒ推進全国大会実行委員会
実行委員会事務局： 公益財団法人廃棄物・３Ｒ研究財団
東京都墨田区両国 3-25-5　JEI 両国ビル８F
TEL:03-6908-7311 FAX:03-5638-7164

古紙パルプ配合率70％再生紙を使用

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙への リサイクルに適した材料［Aランク］のみを用いて作製しています。

この製品は、古紙パルプ配合率 70%の再生紙を使用しています。このマークは、３Ｒ活動推進フォーラムが定めた表示方法に則って自主的に表示しています。